長崎県文化財調査報告書　第１８５集

地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅱ

２００５

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第１８５集

地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅱ

・上篠原遺跡　（国見町）
・カラカミ遺跡（壱岐市）
・橘遺跡　　（五島市）

２００５

長崎県教育委員会

発刊にあたって

長崎県教育委員会では、県内の拠点遺跡の範囲・性格・時代などの解明のために発掘調査を実施し、積極的に遺跡を保護することを目的として、平成14年度から地域拠点遺跡内容確認発掘調査を実施しております。

本書は平成15年度に発掘調査をおこなった国見町上篠原遺跡、壱岐市カラカミ遺跡、五島市橘遺跡の調査結果を記録したものです。

この調査報告書が本県の埋蔵文化財についての理解と愛護の精神を深め、学術、教育、文化財保護のために広く活用されることを念願するものであります。

発掘調査の実施にあたってご理解とご協力いただきました地元の関係の皆様と教育委員会に深く感謝申し上げます。

平成17年 3 月31日

長崎県教育委員会教育長
立石　　暁

例　　言

1　本書は長崎県教育委員会が平成14年度から実施している地域拠点遺跡内容確認発掘調査の結果報告である。

2　本書には、平成15年度に調査を行った上篠原遺跡（南高来郡国見町）、カラカミ遺跡（壱岐市）、橘遺跡（五島市）の調査結果を収録した。

3　本書では各遺跡について分担執筆した。それぞれの遺跡についての執筆者は、以下のとおりである。

上篠原遺跡	川道　寛・柚木亜貴子
カラカミ遺跡	古門　雅高・山田　英明
橘遺跡	同上

4　詳細は各項の例言を参照されたい。

5　本書の総括編集は古門がおこなった。

総　目　次

Ⅰ　上篠原遺跡
南高来郡国見町所在
1　遺跡の立地と環境……1
2　調査……3
3　遺物……9
4　まとめ……13

Ⅱ　カラカミ遺跡
壱岐市所在
1　遺跡の立地と環境および調査履歴……25
2　調査……27
3　遺物……30
4　まとめ……34

Ⅲ　橘　遺　跡
五島市所在
1　遺跡の立地と環境および調査履歴……43
2　調査……45
3　遺物……48
4　まとめ……50

第Ⅰ部　上篠原遺跡

例　　言

1．本書は南高来郡国見町に所在する上篠原遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は長崎県教育庁学芸文化課が主体となり，国見町教育委員会の協力を得て，平成16年２月23日から３月５日にかけて実施した。
3．調査関係者は次のとおりである。

調査担当　長崎県教育庁学芸文化課		
	主任文化財保護主事	川道　　寛（現埋蔵文化財班係長）
	文化財調査員	柚木亜貴子
調査協力　国見町教育委員会	社会教育係	辻田　直人
	文化財調査委員	竹中　哲朗

4．発掘の許可をこころよく許可していただいた地主の林田正光氏に感謝いたします。
5．本書作成に当たって，長崎県国見高等学校考古学展示館より上篠原遺跡の出土品を借用するにあたり国見高校の皆様方のご協力を頂いた。
6．遺構の実測は竹中氏の協力を得て調査担当者が行った。
7．遺物の実測は竹中氏の指導のもと柚木が行った。トレースは柚木と横田愛子，和田美加が行った。
8．その他の遺物については川口洋平氏・東貴之氏にご教示頂いた。
9．本書における遺物・写真・図面は長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室で保管している。
10．本書の執筆・編集は川道・柚木が行った。

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1
第２章　調査
　第１節　調査に至る経緯……3
　第２節　調査の方法……4
　第３節　層位……5
　第４節　遺構……7
第３章　遺物
　第１節　土師器……9
　第２節　その他の遺物……12
第４章　まとめ……13

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡(Ｓ＝1/25,000) …… 2
第２図　調査区位置図(Ｓ＝1/5000) …… 3
第３図　調査区配置図(Ｓ＝1/250) …… 4
第４図　土層図(Ｓ＝1/40) …… 6
第５図　第３・５・６区遺構平面図(Ｓ＝1/50) …… 7
第６図　第６区遺物出土状況(Ｓ＝1/40) …… 8
第７図　第６区ＳＫ４(Ｓ＝1/20) …… 8
第８図　出土土器（Ｓ＝1/3) ……10
第９図　出土土器②（Ｓ＝1/3） ……12
第10図　土器集成図（Ｓ＝1/6） ……14

表　目　次

第１表　出土土器観察表……11

図　版　目　次

図版１　調査区全景……18
第４区東側土層断面……18
第４区東側土層断面（拡大） ……18
第５区南側土層断面……18
第６区遺物出土状況……18
第６区遺構検出状況……18
第６区SK4……18

図版２　出土土器①……19

図版３　出土土器②・貿易陶磁……20

図版４　出土土器③（表）・（裏） ……21

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

長崎県の南東部に位置する島原半島は，北から東にかけて有明海に面し，西側は橘湾に接する胃袋状の半島である。半島中央部は，雲仙岳を中心とした国立公園となっている。

国見町は島原半島北側に位置しており，雲仙岳から有明海に向かって緩やかに広がる火山性扇状地の中心部を占めている。

上篠原遺跡は，国見町北側に位置しており約2kmで海岸に達する。有明海に向けて北上する土黒西川と倉地川に挟まれた小高い段丘上に立地し，標高は38mを測る。

遺跡の周辺では，イチゴを栽培しているビニールハウスや畑が多く見受けられるが，両河川の下流域に行くにしたがって大規模な水田地帯が広がる。（柚木）

第２節　歴史的環境

島原半島では近年，圃場整備事業により各地で緊急発掘調査が行われており，国見町も例外ではない。範囲確認調査によって，次々と国見町の歴史的背景が明らかにされている昨今である。上篠原遺跡周辺では旧石器から古代，中世までの複合遺跡が多く確認されている。

旧石器時代ではその時代を代表する遺跡として，雲仙火山の北麓に当たる標高200～230m程の台地上に百花台遺跡群がある。全国的にも注目されており，昨年度も域拠点遺跡の確認調査が行われた。小ケ倉Ｂ遺跡では，後期旧石器時代の細石器の良好な資料が出土している。また近年の国見町教育委員会の行った調査でも旧石器時代が明らかになっている。松尾遺跡では，後期旧石器時代初頭と考えられる石器群が検出され，県内では最古期の様相を示す資料として注目されている。同様の資料が出土している石原遺跡では，石器群が層位的に検出されている。十園遺跡では，2つの旧石器時代の文化層が層位的に検出されている。

十園遺跡及び小中野Ａ遺跡では，縄文時代のものと思われる落し穴状遺構が検出されている。また，石原遺跡では，縄文時代早期・前期・晩期の土器や石器も多く出土している。専正寺遺跡はこれまで発掘調査はされておらず，縄文・弥生時代の遺物包蔵地として認識されてきたが，国見町教育委員会の行った範囲確認調査によって，縄文時代晩期の遺物包含層が検出されている。そのほかにも表土中から古代・中世の遺物が検出されており，陶硯や須恵器が含まれている。

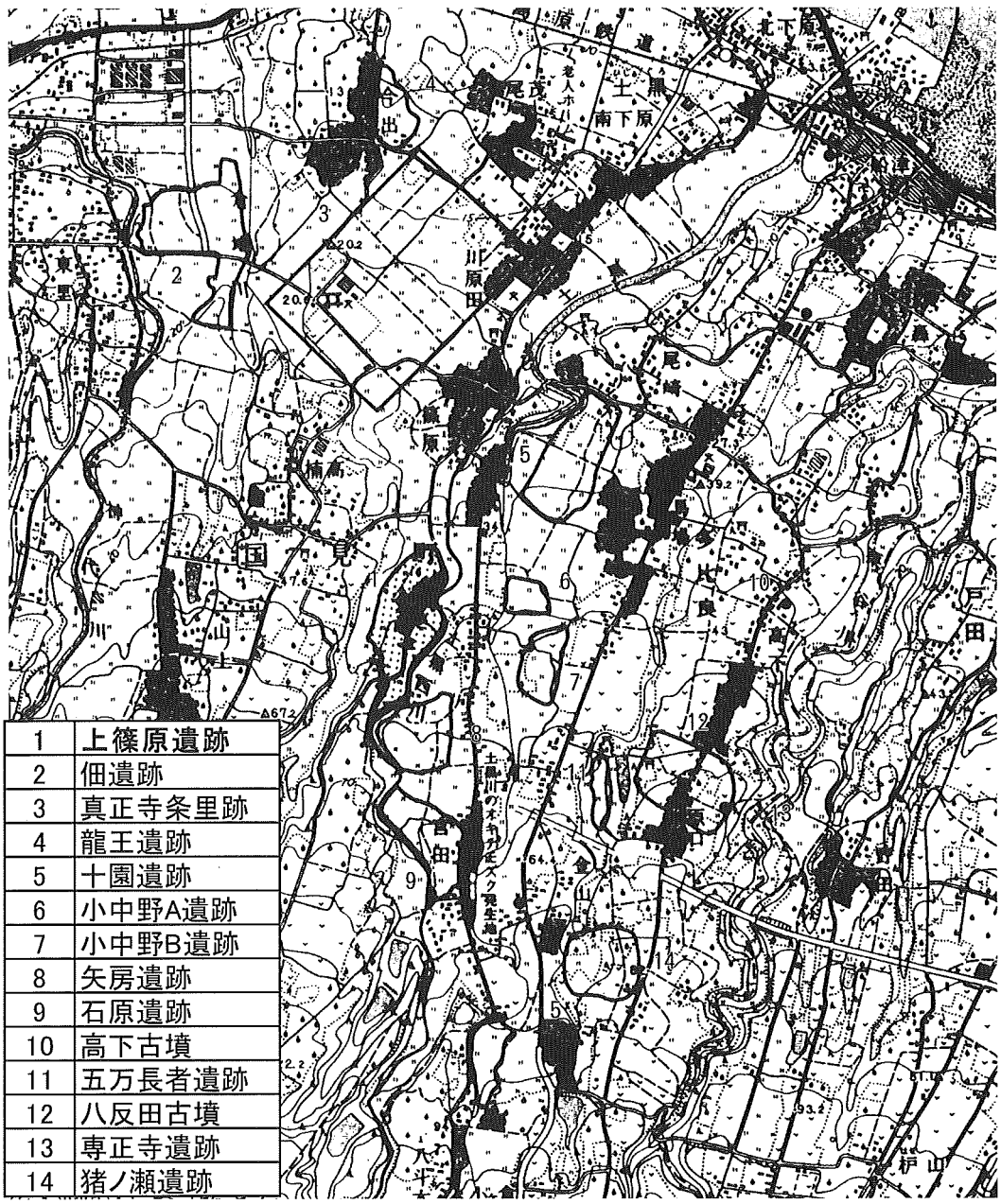
上篠原遺跡は古墳時代の遺跡である。島原半島北部自体が古墳の多い地域であり，隣接した有明町には古墳群も存在し，有明町教育委員会によって発掘調査が行われている。国見町にも数基の古墳が存在し，調査が行われている。その中で小田富士雄氏は高下古墳を，古田正隆氏は八反田古墳を調査している。高下古墳は追葬可能の横穴式石室である。6世紀中葉から6世紀末までの利用が考えられる。巨大な天井石が石室内に落ち込んでいたためか，盗掘を免れているため，豊富な副葬品が床面上より出土している。高下古墳は小田氏によって島原半島北部に権勢を誇った豪族の墳墓として位置づけられている。八反田古墳に関しては，墳丘の土，及び石室の崩壊がひどいため，横穴石室の円墳であるという推測がなされただけである。

松尾遺跡・矢房遺跡では住居址が検出されており，床面から出土した土師器の編年研究がなされている。佃遺跡では，古墳時代初期のものと思われる大型掘立柱建物跡と竪穴住居が同じ集落内に検出

され，この地域の豪族の拠点集落と考えられている。このほかにも佃遺跡では，弥生中期から末にかけての土器片，甕棺も出土している。

古代では，十園遺跡において『肥前国風土記』中に登場する高来郡衙に関連すると思われる掘立柱建物群が発見され，多くの墨書土器も検出された。建物跡の北側の溝からは多数の遺物が出土し，土器片とともに頁岩製の石帯が出土している。五万長者遺跡では古くから古瓦が出土することが知られ，江戸時代には島原藩へ古瓦を献上したという記録が残っている。昭和４５年に五万長者屋敷調査団が調査を行っているが，後，平成７年に長崎県教育委員会で重要遺跡範囲確認調査を行い，版築の存在を確認し，祭祀遺構を検出した。最近では出土する瓦から「寺院跡」との見方が強まっている。

上篠原遺跡周辺は，古墳・古代の遺跡がとりわけ多く，これらの時代を中心に，長きにわたって島原半島でも拠点となる地域であったことが伺える。（柚木）



第１図　周辺遺跡（Ｓ＝1/25,000）

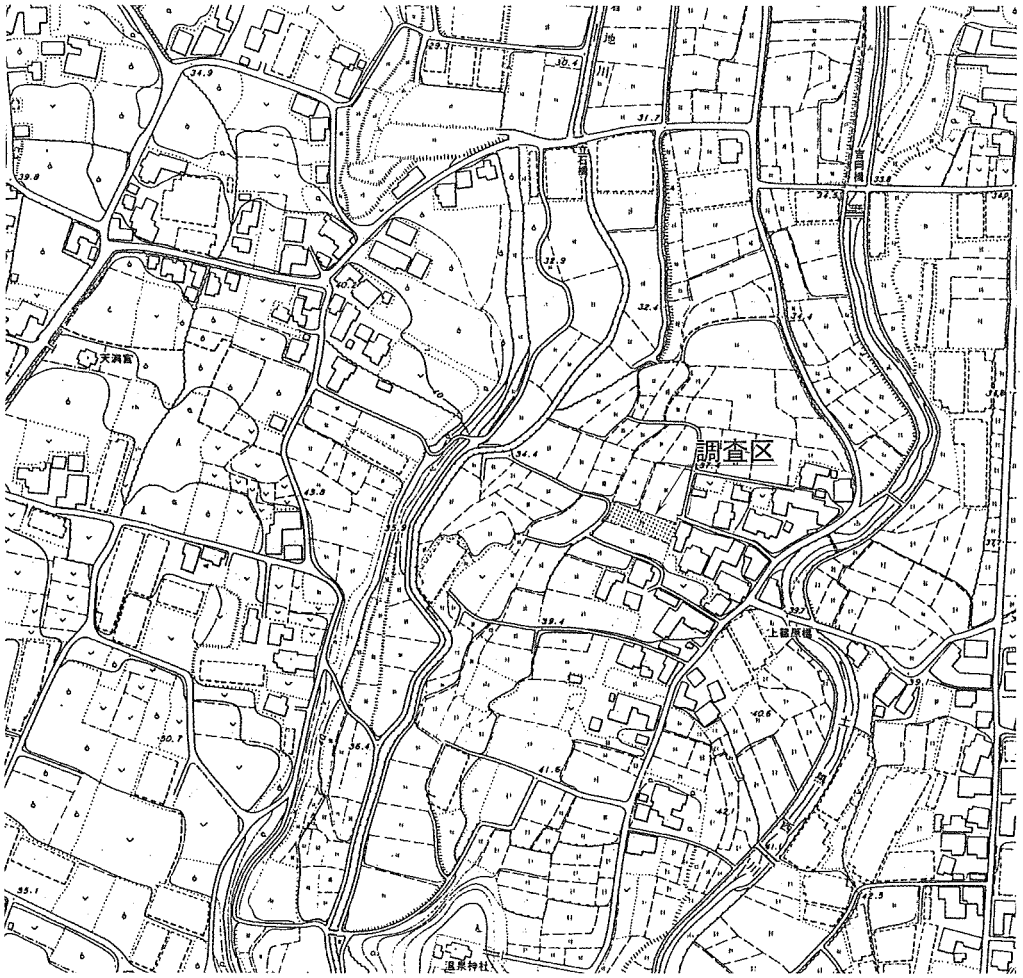
第２章　調査

第１節　調査に至る経緯

当遺跡は，ミカン苗木植え付け中に植樹坑から完形の陶質土器や多くの土師器などが出土し，早くから古墳時代中期の遺跡として注目されていた。その発見をきっかけに数カ所盗掘を受け，相当な量の土器片が掘り出され，持ち出された。その後遺物は，長崎県立国見高校考古学研究部により収集されたが，遺跡として認知されながら何の検証もされず，遺物だけが20年間高校に保管されていた。

昭和60年，ミカン畑から一般畑作地に転用されるため，地主から承諾を受け，国見高校考古学研究部によって調査が行われた。第1次調査では，良好な遺物の包含層が畑の西側に確認され，完形の陶質高杯1点と多数の土師器が出土した。遺構も確認されたが，高校の冬期休暇を利用した調査であったために，遺構の検証ができないまま埋め戻し，作業を中断した。そして遺構解明のため第２次調査を行い，第１次調査で検出した遺構が竪穴住居址であることが判明した。残念ながら，1988年に概要報告がなされただけで，正式な報告がなされないまま今日に至っている。今回の調査は，概要報告にとどまっている遺跡の内容を改めて把握することを目的として行われた。

国見中部地区県営圃場整備事業の一環として，平成9年から二カ年にわたり国見町教育委員会が当遺跡周辺にて試掘調査を行った。その結果，上篠原遺跡は土黒川左岸に広がる台地上一帯が遺跡の範囲に入る可能性がでてきたとして，町教育委員会により遺跡範囲の拡大が決定されている。



第２図　調査区位置図（Ｓ＝1/5000）

第２節　調査の方法

今回の調査は，遺跡範囲内が畑地・水田などの農業地帯で，作物との兼ね合いから調査区を広げることができなかった。そのため前回と同じ畑内に調査区を設定した。

当初は，前回調査区の一部を含めたかたちで調査区を４箇所設定した。しかしミカン植樹坑や盗掘坑が点在し，良好な遺構を検出できなかったため，新たに２箇所設けた。作業はすべて人力により行われた。

第１区（７ｍ×２ｍ）

調査区の南側が前回調査区と重なっている。西側壁面に近いところで土師器が出土した。

第２区（4.5ｍ×２ｍ）

調査区の西側に直径1.3ｍほどの坑が検出されたが，検出状況から見て撹乱と判断した。表土，５層，６層から若干遺物が出土した。

第３区（1.5ｍ×5.5）

調査区西側が前回調査区と重なっている。中央部にピットと，第６区にまたがる土坑が検出された。表土から多くの遺物が採集された。

第４区（1.5ｍ×3.5ｍ）

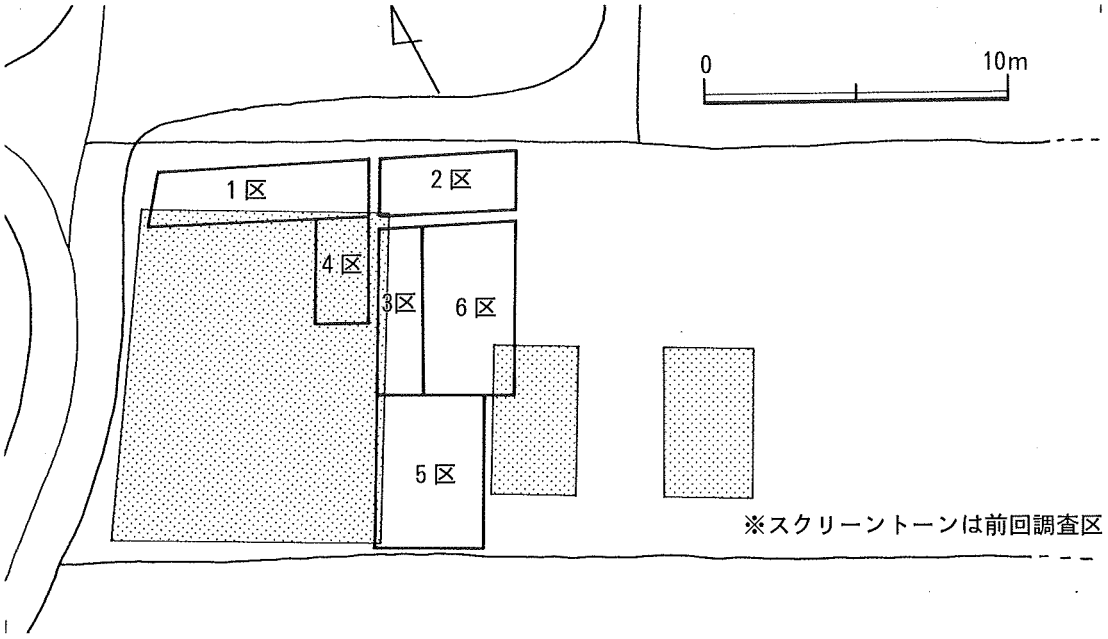
調査区全体が前回の調査区内であり，５層を掘り込み地表から60cm下まで前回の調査において掘削されていた。

第５区（3.5ｍ×５ｍ）

数基のピットを検出した。調査区中央は撹乱を受けており，調査区は完全に分断されている。遺物は主に５層から出土した。

第６区（３ｍ×６ｍ）

包含層の残りは良好で，５層を掘り込む数基の遺構とともに，その上面に土器溜りを検出した。



第３図　調査区配置図（Ｓ＝1/250）

第3節　層位

上篠原遺跡の所在する丘陵は，雲仙岳から延びる火山性扇状地であり，遺跡の標高は約38mである。丘陵は，その東西を土黒西川と倉地川によって浸食されており，両川との比高差は約5mを測る。今回の調査区の南には温泉神社がある。その神社の所在する丘陵と本遺跡の乗る丘陵は比高差で5m程度あり，異なる段丘面といえる。この面からは，調査地点以外からも多くの遺物が出土しており，丘陵全体を上篠原遺跡として理解することができる。

国見高校が実施した発掘の所見によれば，第Ⅲ層の黄褐色粘土層を包含層としている。この層は，厚さ約40cmで，畑の西側にみられる層であり，東側では昭和32年の水害復旧時に埋め土として削平されたといわれている。この層は，今回の調査でいう第5層のことであるが，その残存状況は，前回の発掘や盗掘等による撹乱もあり，決して良好ではなかった。(川道)

上篠原遺跡の土層

第1層：表土。

第2層：耕作土。20～30cm程度。ふかふかの粘性の乏しい土層である。

第3層：黒褐色粘質土。20cm程度。粘質は弱い。0.5～1cm程の小礫を少量含む。

第4層：茶褐色土。10～20cm程度の薄い土層で，極めて締まりがよい。5層を覆う硬質の粘質土であり，貼床状になっている。

第5層：黄褐色粘質土。60～80cm程度のやや厚い土層で，粘性はそれほどないがやや締まっている。炭化物・赤褐色の礫を含む。国見高校調査時のⅢ層にあたり，遺構構築面である。部分的に色調が変化することがあり，遺構の確認に支障を来すこともある。

第6層：明黄褐色粘質土。50cm程度の層厚で，粘質はやや弱い。国見高校調査時のⅣ層に当たり，遺物は包含していない。

第7層：黒褐色粘質土。層厚40cm前後。粘質は非常に強い。第9層（いわゆる樫の実層）の漸移的な土層と考えられる。クラック（間裂）が顕著にみられる。

第8層：黒褐色粘質土。層厚40cm程度。白色パミスが混じる。第7層と同様に，第9層の漸移的な土層である。

第9層：黒褐色粘質土。40cm程度。礫石原火砕流堆積物（俗に言う樫の実層）である。粘性が非常に強く，ガチガチに硬く締まっている。白・ピンクのパミスを大量に含む。百花台Ⅳ層に比定される。

第10層：黒褐色粘質土。層厚20cm程度。パミスをほとんど含まない。百花台Ⅴ層に比定できる。

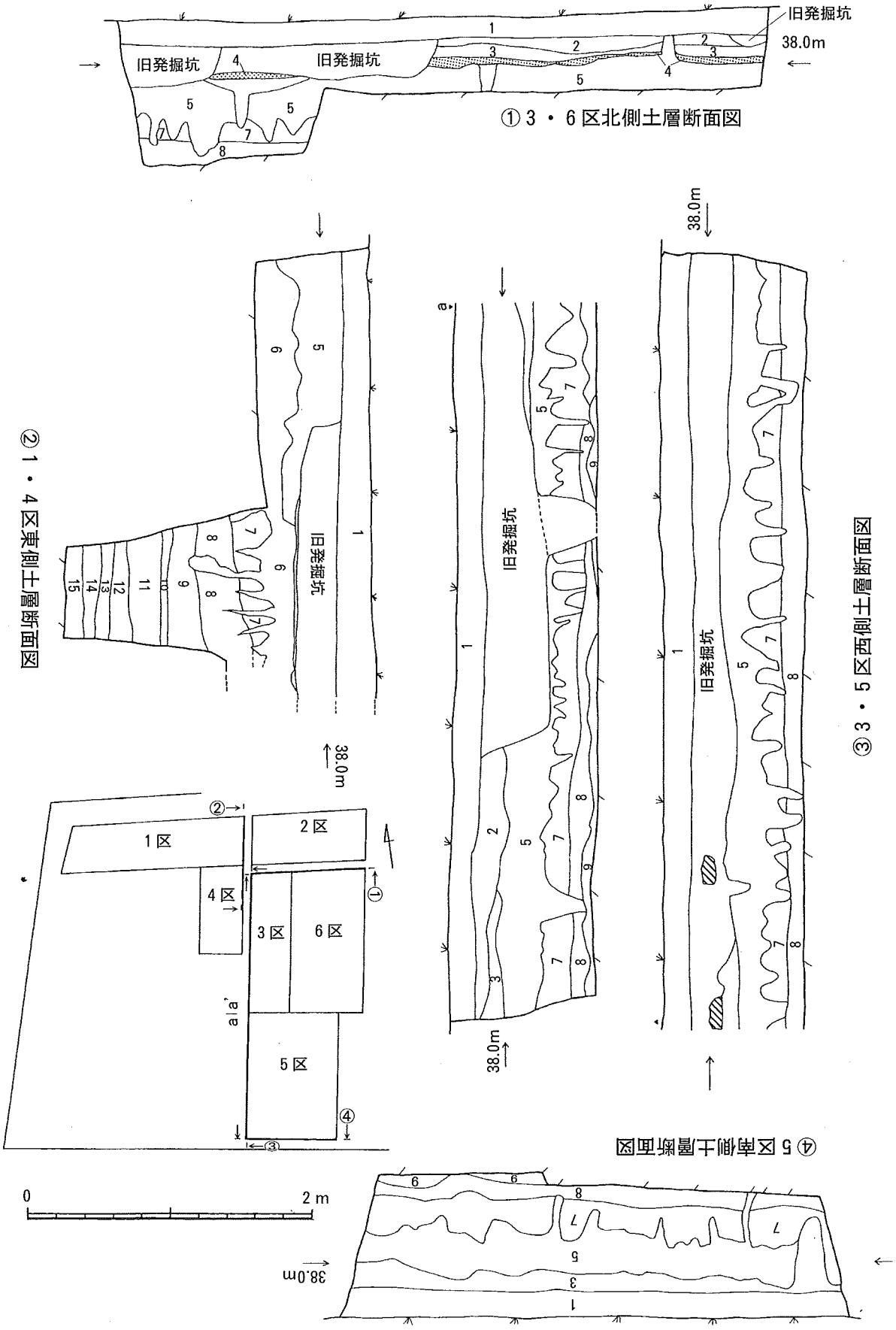
第11層：黒褐色粘質土。層厚50cm程度。白・ピンクのパミスを含む。8層に比べ若干明るい。百花台Ⅵa層に比定できる。

第12層：黒褐色粘質土。20～30cm程度の層厚。1～2cm大の白色パミスを多量に含む。百花台Ⅵb層に比定できる。

第13層：黒褐色粘質土。10cm程度の層厚。1～2cm大の白色パミスを含む。百花台Ⅵc層に比定できる。ＡＴ火山灰の降下層である。

第14層：黄褐色粘質土。20cm前後の層厚。粘質は強い。パミスを含まない。
第15層の漸移層である。

第15層：黄色粘質土。粘質は非常に強い。百花台Ⅷ層に比定できる。


①３・６区北側土層断面図
②１・４区東側土層断面図
③３・５区西側土層断面図
④５区南側土層断面図
旧発掘坑
38.0m
1区
2区
3区
4区
5区
6区
a|a'
0
2 m

第４図　土層図（S＝1/4）

第4節　遺構

第5区検出遺構

5区では13基のピットが検出された。すべて5層を掘り込んでいる。調査区中央部は攪乱のため遺構は検出されなかったが，それ以外には偏りがなく存在している。直径10cm～40cmほどで，円形のものと楕円形のものが存在する。深さは20cm～50cmと様々である。しかし遺構の分布と形態に規則性がないことから，その性格は不明である。

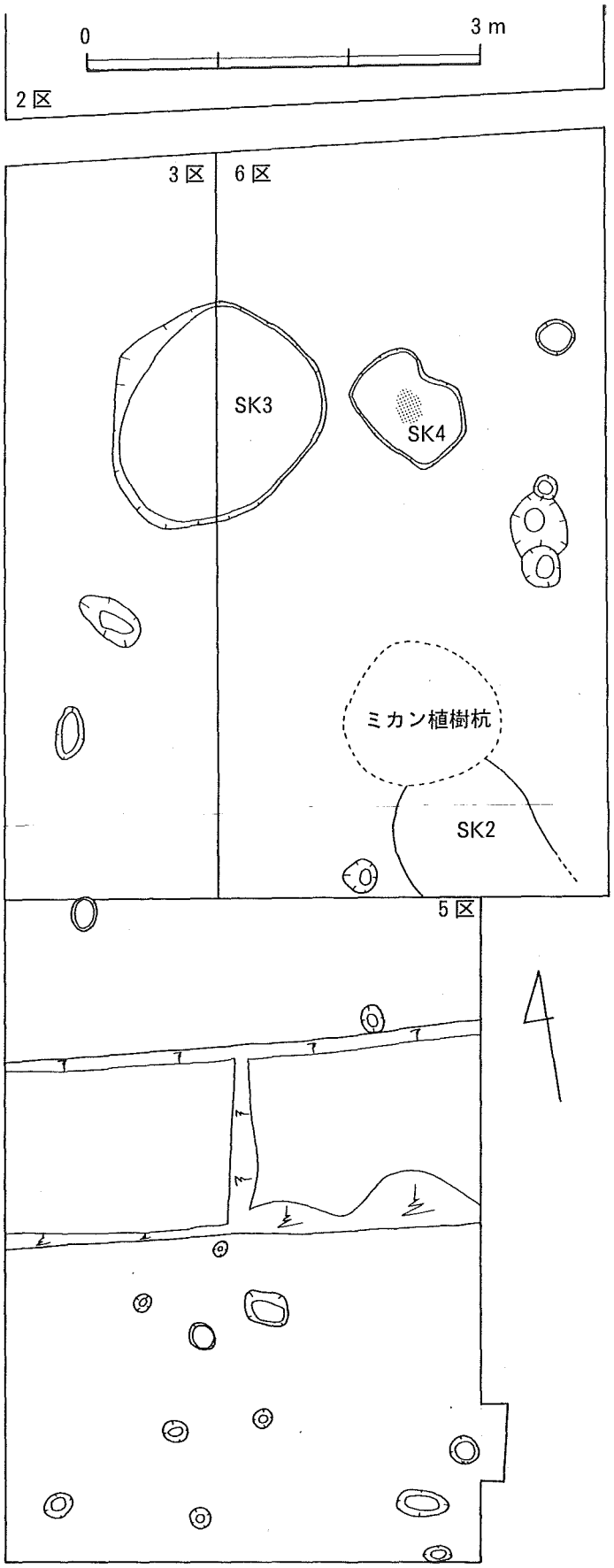
第6区検出遺構

6区の遺構はすべて5層を掘り込んでいた。

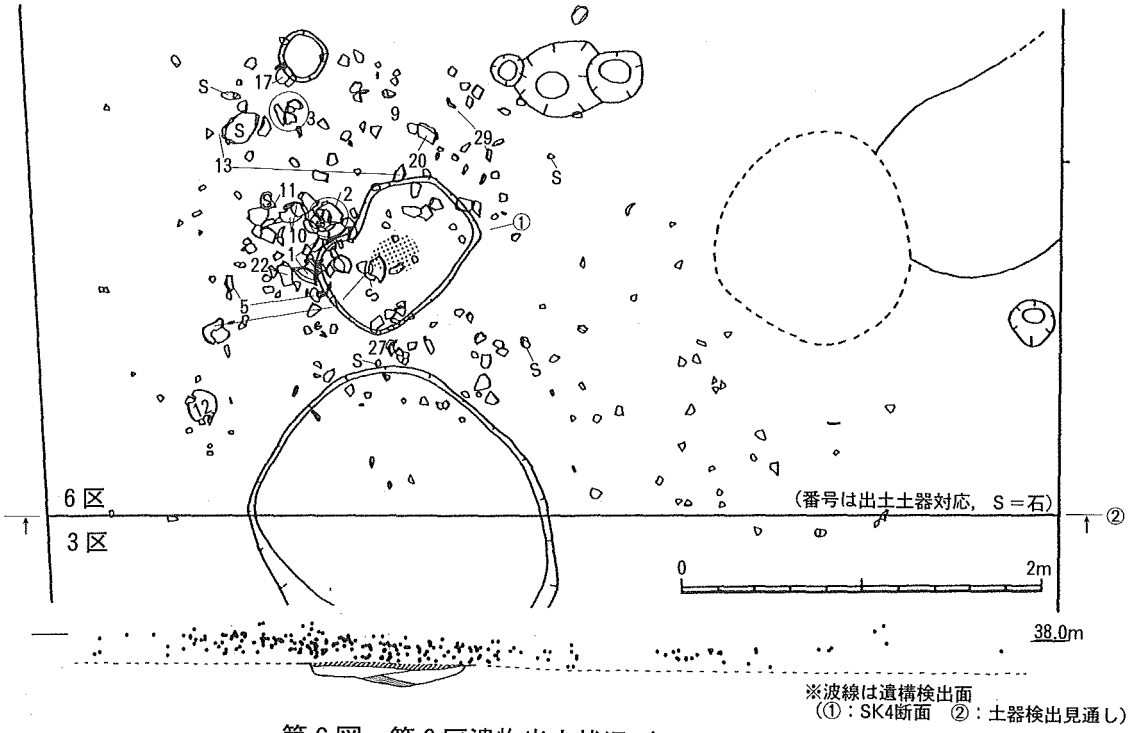
ピットは5基確認された。SK4の北東側のピットは深さが10cmと浅く，遺物の出土もなかった。調査区南側のピットは深さ24cmを計り，土師器の小片が2点出土している。また切り合いの発生している調査区中央のピットでは甕や高坏など土師器片が出土しているが，いずれも形態的特徴の確認できるものではなかった。したがって遺物による時期差は判別できなかった。

土坑は当初4基存在したと考えていた。

6区の調査区北半分に土器が広く散布している状況があり，当初SK1として遺物を取り上げていた。5層上面に一部広がりを見せる黒褐色硬質土の硬化面を取り除いていく中で土器が現れてくるが，明



第5図　第3・5・6区遺構平面図（S＝1/50）



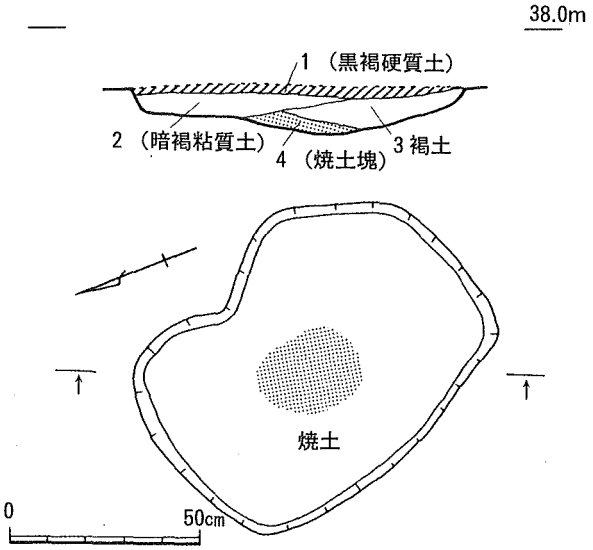
第6図　第6区遺物出土状況（S＝1/40）

確な掘方が見つからず，遺構の性格はつかめなかった。SK4の北側に遺物が集中して散布するが，破片の接合もこの範囲内で器形のわかるものが多い。遺物の検出レベルは37.80m～38mに集中する。遺物の他に石を検出したが，使用痕や被熱跡は見られなかった。

SK2は深さが10cm程しかなく，北側をミカン植樹坑で削平されている。出土遺物も土師器の小片が数点検出されているにすぎない。覆土には黄褐色ブロックと暗褐色のブロックを含んでいる。

SK3は3区掘削時に半分が検出されていたが，その後隣接する6区に全体が現れた。全長1.7mほどあるが，深さは15cmと浅く，遺物も土師器が数点出土しただけであった。覆土はしまりがなく，暗褐色硬質土に黄褐色土が混じっていた。

SK4は，最下層に焼土塊をもち，その上に焼土粒子が主体となる褐色土が存在する。その2層を暗褐色粘質土が覆い，最終的には黒褐色硬質土が土坑を埋めている。上面に広がる土器との関係は，SK4出土の土器が小片のため遺物からの判断は出来ないが，遺構も5層上面に散布している遺物も硬化面で埋められていることから，時期差はないと考えられる。



第7図　第6区ＳＫ４（S＝1/20）

第3章　遺物

調査区全体では表土からの出土が多かったが，5層からの出土も若干見られた。表土からは，粘土塊や鉄滓なども検出された。国見町では中世から近世にかけて製鉄が行われていたことを裏付ける遺構が矢房遺跡・十園遺跡から検出されている。遺構からも遺物が出土したが，いずれも小片のため器形のわかるものはなかった。

遺物の大半が土師器であったが，須恵器片も若干出土した。以前発見された陶質土器は出土しなかった。また，黒曜石・縄文土器片や中世貿易陶磁器片も少量出土した。第6区の土器溜りから，土師器とともに石（軽石等）も出土したが，特に使用痕や被熱の痕は見られなかった。

第1節　土師器

ほとんどが6区の土器溜りから一括して取り上げたものである。破片が多いなか，器形のわかるものを31点図化した。高坏は全体の器形がわかるものがあり，出土点数も多い。一方甕・壷類は破片が多く，全体の器形を把握できるものはわずかであった。手づくね土器，坏も若干出土している。

1～15までは高坏である。口縁部はすべて外反しており，口縁までの立ち上がりが内湾するものが多い。その中で13はやや反り気味に立ち上がる。坏の立ち上がる接合部分がなだらかなのは15のみである。高坏の内面底は平らになっているものが多く，刷毛調整の痕が残るものも多い。2の坏部下半中ごろには一条の沈線が巡っていた。

脚部は屈曲が極端にわかるものと，スカート状になだらかに広がるものとが存在する。9・11は脚部が途中膨らんでいる。坏部と脚部の接合部は4・7・12がソケット状につながるようになっている。

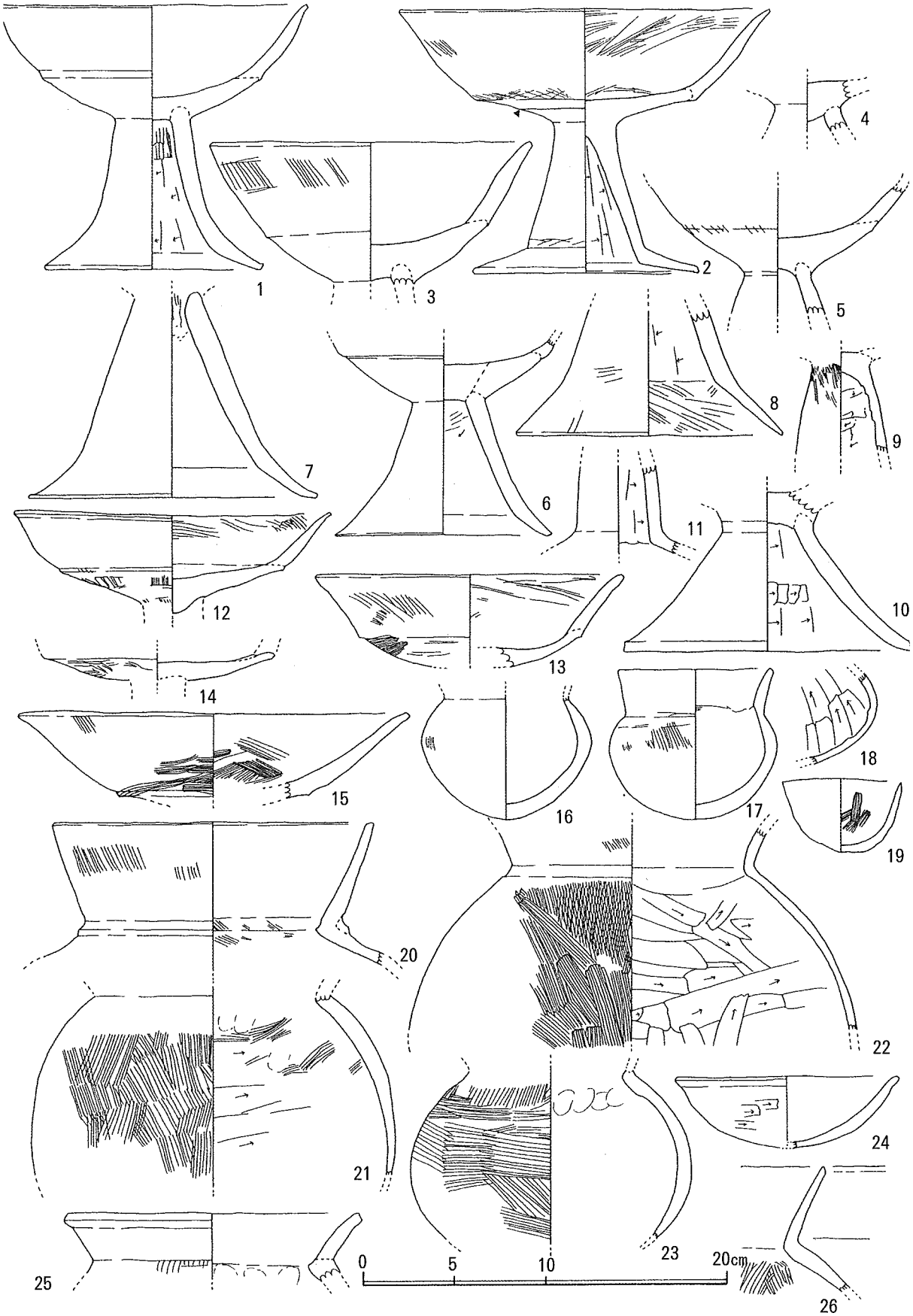
16～18は小型壷である。16・17は器壁が厚いが，18は内面を削り器壁を薄くしている。また18は外面も磨かれており，作りが丁寧で焼きも堅緻である。17は口縁部が直線的に立ち上がり，端部もやや外反する。

19は手づくね土器である。指で押さえながら伸ばしてゆくため，指押さえの痕が器面に現れるが，薄い器壁を作り出すことができる。内面は刷毛目調整を施しナデている。口縁端部はつまんで成形しているため，厚みや器体の高さが一定ではない。

20は広口壷の口縁部から頸部にかけてである。「く」の字にまがり，直線的に立ち上がる口縁部をもち，頸部には粘土帯を巻き付け，横ナデしている。口縁部外面には刷毛調整の跡が残る。21・22は甕の胴部である。21は頸部以下の器壁は厚いが，下以にいくにつれ薄くなる。22は内面全体が削られ頸部近くから器壁は薄い。口縁は直線的に立ち上がる。23は壷の胴部である。胴部最大径は胴部中ごろよりやや下にあり，器壁は厚いが，底部に向かうにつれ薄くなるようである。

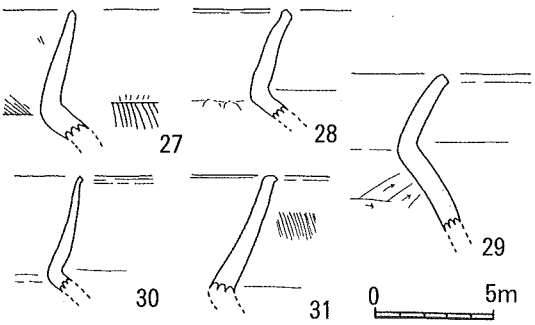
25～31は甕,もしくは壺のの口縁部である。25・29は口縁部が「く」の字に開き，端部はふくらみながらやや外反する。26・27はほぼ直線的に立ち上がり，端部にいくにつれ薄くなっている。28は内湾気味に立ち上がり，端部はつまみだし，ややふくらんでいる。30は内湾気味に直角に立ち上がり，端部で外反する。薄い作りである。31は内湾しながら立ち上がり，端部は外反する。器壁は厚い。

24は坏である。全体的に器壁が厚いが，底部が薄くなっている。口縁部は指でつまみ成形しているため，端部は膨らみ，その下が薄くなっている。外面には削りの痕が一部見られる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0
5
10
20cm

第８図　出土土器（Ｓ＝1/3）

甕，もしくは壷の口縁片からその個体数が多いことがわかる。しかし，注目すべき点は，高坏の出土量であろう。高坏は壷や甕とは異なり，特別な食事や祭事に用いられたと考えられる。多量の高坏が検出されたことは，遺跡の性格を検討する上で重要な手がかりとなることが言える。



第９図　出土土器②（Ｓ＝1/3）

番号	出土地	種別	法量(cm)…(復元)	胎土	色調	調整
1	6区SK1	土師器 高坏	口縁径 (17.2) 高さ　14.6 脚部径 (12.0)	微量の角閃石	外面　橙(Hue5YR7/6) 脚部はやや暗め	坏部内面3.5cm下から外面にかけて横ナデ。 脚部内面は下1cmまでケズリ。脚裾部は横ナデを施す。
2	6区SK1	土師器 高坏	口縁径 (20.6) 高さ　14.6 脚部径 12.5	金雲母 微量の赤・白色粒	内外　橙(Hue2.5YR6/8)	坏部は不定方向の刷毛目を施す。表面はナデ。 脚部内面は不定方向のナデ→ミガキ。
3	6区SK1	土師器 高坏(坏部)	口縁径 (17.8) 高さ　7.8	微量の角閃石 赤色粒(2～3mm)	内外　橙(Hue5YR7/8)	外面一部には刷毛目のの痕が残っているが、全体的に横ナデ。
4	6区SK1	土師器 高坏(坏部)	高さ　2.8	多量の角閃石	灰白(Hue2.5Y8/2) 黄灰(Hue2.5Y6/1)	坏と脚部の付け根部分外面は横ナデを施している。
5	6区SK1	土師器 高坏	坏部最大径 (14.1) 高さ　7.1 脚部最大径 (5.2)	微量の角閃石	内外　橙(Hue5YR7/8)	坏部突帯上に刷毛目があり、外面は横ナデを施してある。
6	6区SK1	土師器 高坏	坏部最大径 (12.3) 高さ　11.0 脚部径 (12.0)	微量の角閃石・石英、砂粒 微量の赤・白色粒	内外　にぶい橙(Hue5YR7/4)	表面は磨耗し、調整の痕は不明瞭である。 脚部内面は上部にケズリが見られる。
7	6区SK1	土師器 高坏(脚部)	高さ　11.0 脚部径　16.0	微量の角閃石、金雲母 赤・白色粒(2～5mm)	内外　黄橙(Hue10YR7/8)	裾部端部から内面の屈曲部分まで横ナデを施し、外面は端部より上はナデている。
8	6区SK1	土師器 高坏(脚部)	高さ　7.0 脚部径 (14.8)	微量の角閃石、砂粒	裾部内外　灰白(Hue2.5Y8/2) 裾部上半分　黄灰(Hue2.5Y6/1)	内面上部は一気に削られいてる。 裾部は刷毛目が施され、横ナデも見られる。
9	6区SK1	土師器 高坏(脚部)	高さ　5.6 脚部最大径 (5.1)	微量の角閃石、金雲母	脚部内外　黄(Hue2.5Y8/6) 坏部底部　浅黄橙(Hue7.5YR8/6)	内面はヘラ削り。 外面脚部の付根から2cmほど下まで刷毛目。
10	6区SK1	土師器 高坏(脚部)	高さ　8.8 脚部径 (16.0)	微量の赤・白色粒(2～3mm)	内外　橙(Hue5YR6/8)	内面はケズリ。裾部は横ナデを施す。 裾部外面はナデを施す。
11	6区SK1	土師器 高坏(脚部)	高さ　4.8 脚部最大径 (6.9)	微量の角閃石、金雲母	外面　橙(Hue5YR6/8) 内面　灰褐(Hue5YR5/2)	内外面ともに横ナデ。 脚部内面は一気に削られている。
12	6区SK1	土師器 高坏(坏部)	口縁径　17.6 高さ　5.7	多量の金雲母・角閃石 赤色粒・砂粒	内外　橙(Hue7.5YR6/6)	坏半分は横ナデを施す。 外面坏下半分は放射状に刷毛目調整で、部分的にナデ消し。
13	6区SK1	土師器 高坏(坏部)	口縁径 (17.0) 高さ　5.1	微量の角閃石、砂粒	内面　浅黄橙(Hue7.5YR8/3) 外面　にぶい橙(Hue7.5YR7/4)	内面は刷毛目と横ナデの痕が残っているが、全体的に磨き。 外面半分は刷毛目→横ナデ。下半分に一部刷毛目が残る。
14	1区2層	土師器 高坏(坏部)	坏部最大径 (12.9) 高さ　1.5	角閃石・石英	内外　明黄褐(Hue10YR7/6) 外面一部　橙(5YR7/6)	内面は剥落しており、調整は不明である。 外面は不定方向の刷毛目が施してある。
15	6区SK1	土師器 高坏(坏部)	口縁径 (21.6) 高さ　4.7	微量の角閃石、金雲母	内面　明褐(Hue7.5YR5/8) 外面　橙(Hue5YR7/6)	内面口縁端部は横ナデの下に不定方向のナデを施す。 外面は端部から2.5cm下まで横ナデ、その下は刷毛目調整。
16	1区2層	土師器 壷	最大径 (9. 4) 全高6. 8	微量の金雲母・角閃石 砂粒・白色粒(1～3mm)	内外　浅黄橙(Hue10YR8/4) 外面底部一部黒くすすけている	内外面ともにナデ消しを行っている。
17	6区SK1	土師器 壷	口縁径　8.6 高さ　8.9 胴部最大径　9.3	微量の金雲母・角閃石・石英 白色粒(2～3mm)	内外　にぶい橙(Hue7.5YR6/4) 外面部分的に灰褐(Hue7.5YR5/2)	口縁部は内外ともに頸部下まで横ナデを施す。内面は頸部のところがヘラ削り。 外面胴部は刷毛目→ナデ消し。
18	6区SK1	土師器 壺	最大長　4.9	金雲母 微量の白色粒(1mm弱)	外面　橙(Hue5YR6/6) 内面　明褐(Hue7.5YR5/6)	内面は一定方向にヘラ削りを行っている。 外面は横ナデを施した後、ナデ消している。
19	6区SK1	手づくね 土器	口縁径　6.5 高さ　4.1	角閃石・石英	内面　橙(Hue5YR7/6) 外面　にぶい黄橙(Hue10YR7/3)	内外ともに刷毛目を施したあと、ナデ。
20	6区SK1	土師器 壺(口縁)	口縁径 (17.7) 高さ　7.9	微量の金雲母、砂粒	内外　橙(Hue7.5YR6/6) 全体褐灰(Hue7.5YR4/1)の斑点	内面は不定方向の刷毛目。 外面は刷毛目のあとナデ消されている。
21	1区2層	土師器 甕	高さ　(10.0) 胴部最大径 (20.1)	角閃石・白色粒(1～3mm)	外面　黒褐(Hue7.5YR3/1) 部分的に浅黄橙(Hue7.5YR8/3) 内面　灰白(Hue7.5YR8/2)	内面上部に指圧痕や刷毛目が見られるが全体的にケズリが施される。 外面は全体的に不定方向の刷毛目。頸部から2cm下まで横ナデ。
22	6区SK1	土師器 甕	口縁最大径 (14.8) 高さ　12.2 胴部最大径 (24.6)	微量の金雲母・角閃石・石英 白色粒(2～5mm)	外面　橙(Hue7.5YR6/6) 内面　にぶい褐(Hue7.5YR5/4)	内面は口縁部が頸部まで横ナデ、胴部は不定方向に削り。 外面は刷毛目調整noあと、口縁部から頸部下にかけ横ナデ。
23	6区SK1	土師器 壺	高さ　(9.3) 胴部最大径 (15.6)	多量の角閃石・石英	外面　明黄褐(Hue10YR7/6) 褐灰(Hue10YR4/1) 内面　褐灰(Hue10YR4/1)	内面は頸部をヘラ削り、下は指圧痕。胴部全体に不定方向のナデ。 外面は不定方向の刷毛目調整のあと、頸部下は横ナデ。
24	6区SK1	土師器 坏	口縁径 (12.4) 高さ　(4.0)	微量の角閃石、金雲母 少量の白・赤色粒	内外　橙(Hue5YR6/6)	外面は口縁部から1cm下まで横ナデ、その下は不定方向のナデを施す。
25	6区SK1	土師器 甕or壷(口縁)	口縁径 (16.4) 高さ　3.3	金雲母・角閃石	内外　浅黄橙(Hue10YR8/4)	口縁は内外ともに横ナデを施す。 頸部下内面は指圧痕が見られれ、外面には刷毛目を施す。
26	3区2層	土師器 甕or壷(口縁)	高さ　6.9	角閃石・石英、多量の砂粒	外面　浅黄橙(Hue7.5YR8/4) 内面　赤灰(Hue2.5YR5/1)	口縁は内外ともに横ナデ。 頸部下内側は不定方向の刷毛目を施し、外側は不定方向にナデ。
27	6区SK1	土師器 甕or壷(口縁)	高さ　5.4	微量の角閃石、砂粒	内外　黄橙(Hue10YR7/4) 外面頸部下　黒褐(Hue7.5YR3/1)	口縁部は内外ともに横ナデ。内側は頸部に刷毛目のあとが残る。 外面は頸部に刷毛目調整が施されている。
28	6区SK1	土師器 甕or壷(口縁)	高さ　4.5	角閃石 少量の白色粒(2～4mm)	内面　橙(Hue7.5YR7/6) 外面　灰褐(Hue7.5YR4/2)	内面は頸部上1cmまで口縁部に横ナデを施す。 外面は刷毛目を施している。
29	6区SK1	土師器 甕or壷(口縁)	高さ　6.5	微量の角閃石・砂粒	外面　褐灰(Hue10YR4/1) 内面　にぶい黄橙(Hue10YR7/3)	口縁部は内外ともに横ナデ、内側の頸部下はヘラ削りを行っている。
30	6区SK1	土師器 甕or壷(口縁)	高さ　4.8	微量の石英 赤色粒(2～3mm)	内外　橙(Hue5YR6/8)	内面は刷毛目を施したあと、口縁から2cm下まで横ナデ。 外面は頸部下まで横ナデ。
31	6区SK1	土師器 甕or壷(口縁)	高さ　4.9	砂粒	内外　浅黄橙(Hue7.5YR8/6) 内面は若干明るい	内面は斜め方向の刷毛目、端部から2cm下のところから横ナデ。 外面には全体的に横ナデ、口縁中ほどに刷毛目が残る。

第１表　出土土器観察表

第２節　その他の遺物

縄文土器

縄文土器が数点出土した。そのうち２点を図化した。どちらも阿高式土器系の特徴を持っており，暗赤褐色の胎土に粒状（１～２mm程）の滑石を多量に含んでいる。その他にも金雲母・角閃石を含んでいる。

１は厚さ８mmを呈す。深鉢形の精製土器の胴部で，ほぼ直立する部分と推定される。外面は凹線文で，縦方向と横方向突部分が存在し，縦方向に調整を入れることによって文様を作りだしている。

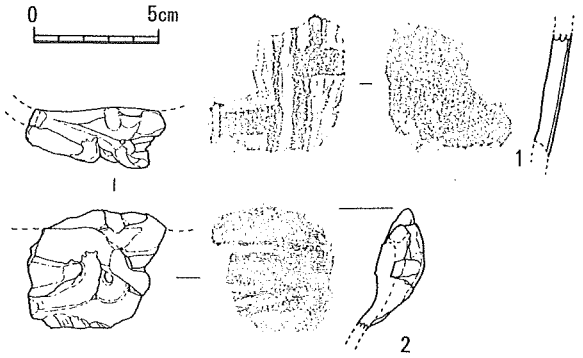
２は深鉢形土器の口縁部で，１と同様に精製土器である。本体になる器壁に，棒状にした粘土をドーナツ状にねじりながら貼付けている。さらにその輪になった部分の両側に棒状の粘土を貼付け，胴体に固定している。口縁端部にも装飾の欠けた痕が窺える。装飾の施された下の方には調整の痕が残っている。

中世貿易陶磁

貿易陶磁は主に口縁の破片の出土が見られたが，いずれも小破片のため図化できなかった。今回，山本信夫氏の編年研究を元に，口縁部などから検討した。その結果，以下のような種類のものが出土した。

・龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5a・5b類（1200～1230）
　…外面には連弁文が見られる。
・同安窯系（13c）
　…外面に猫掻文あり。
・白磁Ⅸ類の皿（13c－鎌倉期）
　…底部。器肉が厚い。
・青白磁合子（12～13c）

13世紀のものが中心となって出土している。貿易陶磁に関しては，隣接する矢房遺跡でも龍泉窯系青磁が検出されている。さらには南下した猪の瀬遺跡からも青磁の出土が確認されている。今回の調査区からは中世の遺構，及び包含層を確認できなかった。しかし，前述したとおり、鉄滓の出土も確認できたことから，上篠原遺跡のなかでも中世以降の遺構が確認される可能性が十分あると考えられる。



第９図　出土土器②（Ｓ＝1/3）

第4章　まとめ

今回の調査では前回の遺構の再検討を行うために，前回調査区の一部を掘削した。しかし明瞭な土層断面を割り出すことができず，遺構の再確認にはいたらなかった。また，概要報告がなされている住居址についても，検出レベルが明記されていないため，今回の土器溜りとの関連はつかむことができなかった。しかし，旧発掘坑が5層を掘り込んでおり，今回の遺構検出状況と同じであることから，一連のものではないにしろ，同時期に存在した可能性も否定できない。

上篠原遺跡は前述した通り，独立した段丘状に立地している。今回検出されたのは，焼土の出土した面からの高坏を多く含む土器溜りであった。このことから，居住区域としてとらえるのではなく，祭祀を行った施設であって，遺跡の立地条件がそういった特別な空間をつくりだしていたのではないかと考えられる。したがって，前回の調査で検出された遺構も，多量の高坏が出土していることから，住居址ではなく，同じ祭祀に利用された性格の遺構ではないかと推測される。

今回，国見高等学校考古学展示館に収蔵されている未報告の遺物を含め，今回出土した遺物と比較検討を試みた。未報告の資料については，住居址の検出が確認された一連の試掘坑からの出土土師器に限定した。

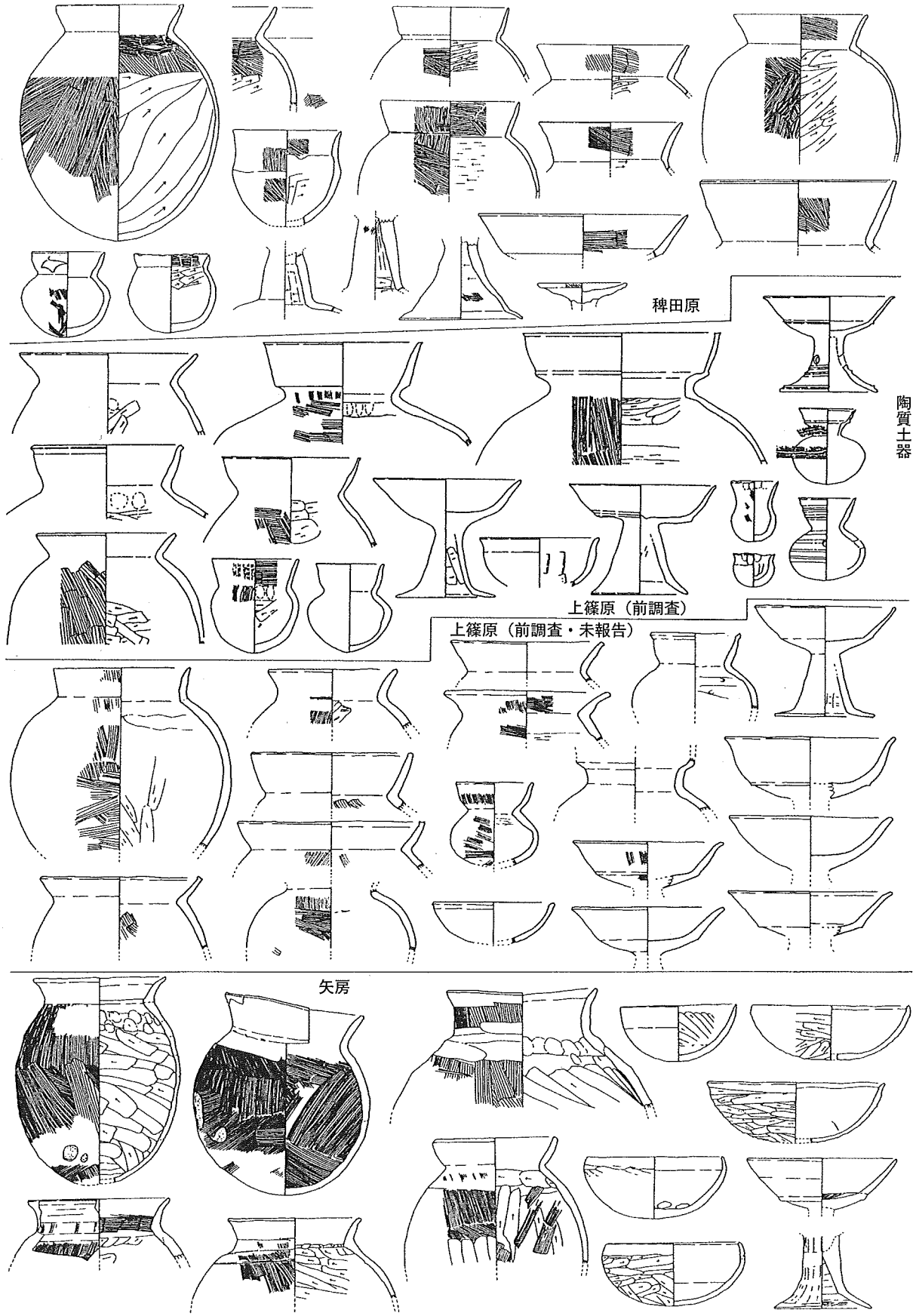
住居址に伴う土師器（甕）の編年から相対的な序列を表しているのは，『石原遺跡・矢房遺跡』の「島原半島の古墳時代住居跡出土土師器」に詳しい（竹中2003)。ここではその編年をもとに上篠原遺跡の未報告資料を見ていきたいと思う。

今回の調査において出土した甕は，口縁から胴部にかけて残存する良好なものは残念ながら検出されなかった。しかし胴部表面に刷毛目を施し，頸部から肩部にかけて横ナデをする技法には差異はない。これについては，未報告の資料も同じである。本書掲載の18の甕は口縁が「く」の字に立ち上がり，表面は前述したとおりである。そして頸部直下から削りが入っており，「稗田原Ⅱ類」の特徴を持っている。上篠原遺跡では，内面に目立って刷毛目調整が残るものはほとんどなく，頸部から肩部にかけて指圧痕が見られ，その下は削られているものが多い。

口縁の形態としては，「く」の字に曲がるものが多く，一部頸部から直立に立ち上がるものも存在する。未報告資料の左上の甕の口縁は，直立に立ち上がっており，後者のものである。甕の内面は，肩部のナデが不十分で接合痕が残っている。胴部下半部は削られている。外面は口縁から縦刷毛から斜位の刷毛が施され，肩部には横ナデが見られる。ほぼ球体をしており，これらの特徴から「矢房Ⅱ類」に近いものと思われる。またこの甕の右斜め下の個体も近しいものではないだろうか。

高坏は，坏部中ほどにふくらみが見られるものが多い。直線的に広がりを見せるものと湾曲しているものとが混在する。脚部は中ぶくらみするものと，スカート状に開くもの，脚部裾部にて急激に広がるものとが存在する。脚部内面は横方向にヘラ削りを施しているものが多い。

本書掲載16の壷は，口縁部のみの出土で胴部の形態は不明である。しかし頸部に粘土帯を巻いていることと，口縁部の調整の技法から，隣接する有明町一野古墳群から出土している広口壷に類似している。一野遺跡では三体の広口壷と高坏の脚部片が共伴している。一方類似資料として熊本県塚原遺跡の広口壷をあげているが，ここでは共伴遺物として二重口縁壷が出土している（竹中2001)。今回の調査では，二重口縁は出土しなかったが，前回の調査で数点の出土が確認されている。塚原遺跡で



第10図　土器集成図（S＝1/6）

出土している二重口縁壷は口縁部が外反しているのに対し，上篠原遺跡出土のものは，内湾気味に立ち上がるものと，やや外反気味に器壁自体は直線を呈すものが出土していることから，形態的な差がある。しかしながら，広口壷と二重口縁壷の共伴は，前回の報告書でも提示しているように，上篠原遺跡が塚原遺跡と並行期に存在したことが伺えよう。今回の広口壷の出土は一野遺跡に次いで本県では2例目となる。

上篠原遺跡は，陶質土器の出土から須恵器出現前後に存在したことが考えられる。これは出土した土師器からも，4世紀末から5世紀初頭の特徴が伺えるため，古墳時代中期の遺跡として位置づけできる。（柚木）

【引用参考文献】

1975『塚原』本文編・付論　熊本県文化財調査報告書第16集　熊本県教育委員会・熊本県文化財保護協会

1975『塚原』資料編　熊本県文化財調査報告書第16集　熊本県教育委員会

諫見富士郎編1988『上篠原遺跡』概要報告書　長崎県立国見高等学校考古学研究部

小田富士雄・藤丸詔八郎・武末純一1988『北九州の中国陶磁－出土品にみる古代の日中交流－』北九州市立考古博物館

川口洋平編1994『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第114集　長崎県教育委員会

中世土器研究会編1995『概説　中世の土器・陶磁器』

大川清・鈴木公雄・工楽善通編1996『日本土器辞典』雄山閣

川道寛編1997『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅴ』長崎県文化財調査報告書第133集　長崎県教育委員会

村川逸朗・福田一志・古門雅高1997『稗田原遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第136集　長崎県教育委員会

辻田直人2002『松尾遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第2集　長崎県国見町教育委員会

竹中哲朗・辻田直人2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第3集　長崎県国見町教育委員会

辻田直人・竹中哲朗2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第4集　長崎県国見町教育委員会

宇土靖之・竹中哲朗2001『一野遺跡Ⅱ』有明町文化財調査報告書第14集　有明町教育委員会

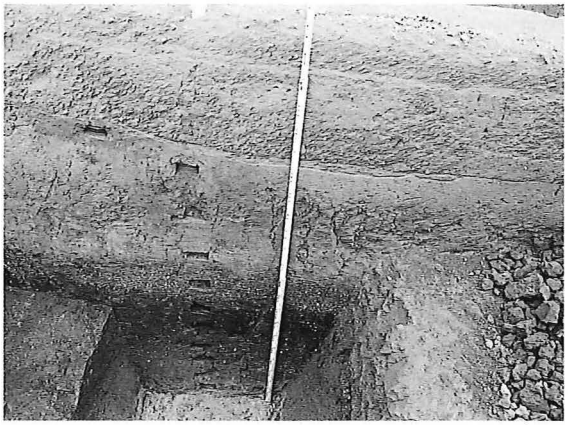
竹中哲朗2001「一野古墳群出土土器の編年」『西海考古』第4号　西海考古同人会

川道寛・古門雅高2004『地域拠点遺跡内容確認調査報告書Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第176集　長崎県教育委員会

図　　版

図版 1

調査区全景

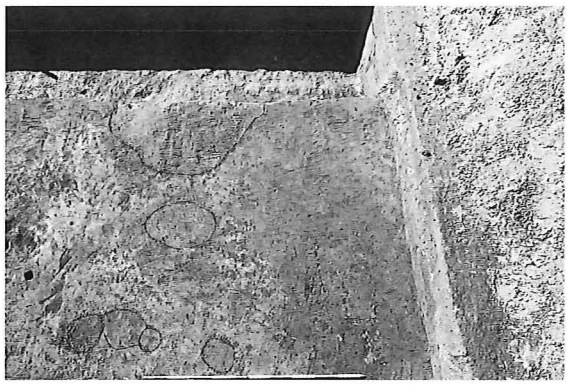


第 4 区東側土層断面

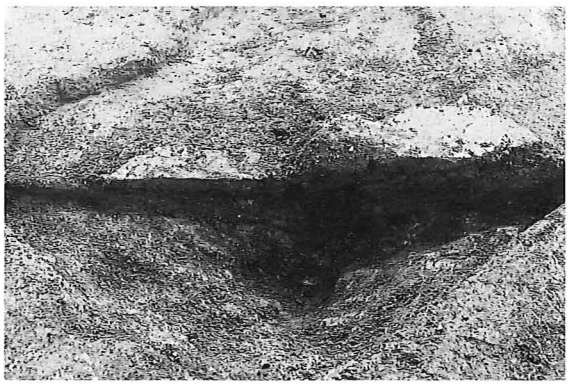
第 4 区東区土層断面（拡大）

第 5 区南側土層断面

第 6 区遺物検出状況



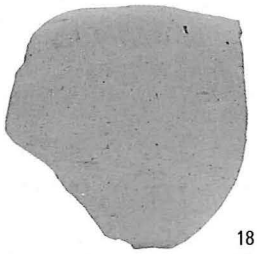
第 6 区遺構検出状況

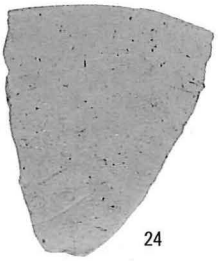


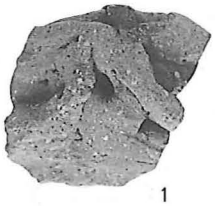
第 6 区　SK4

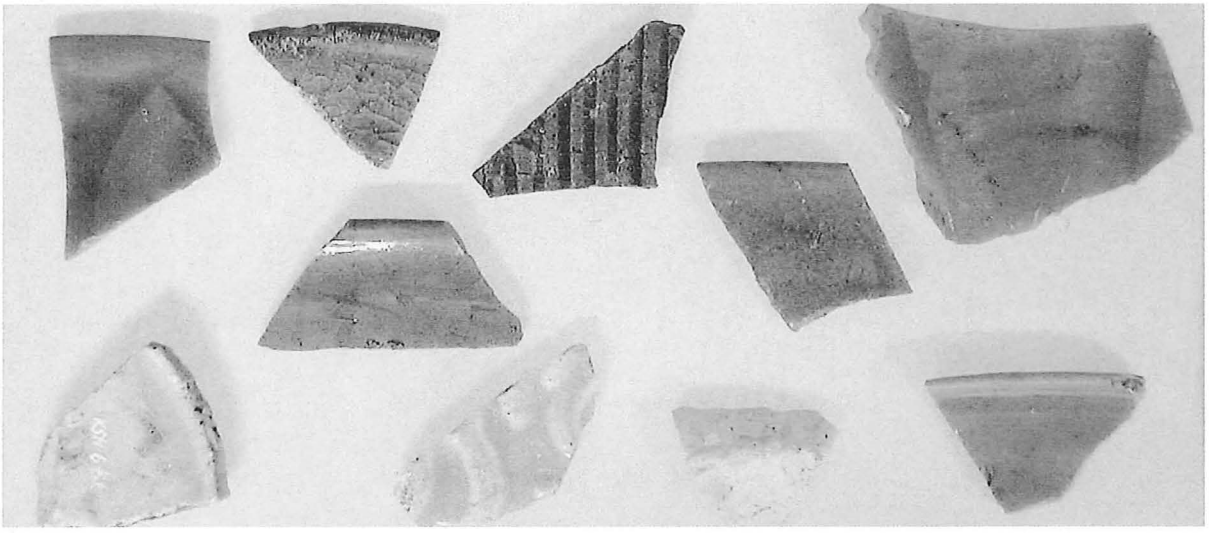
図版 2

出土土器①



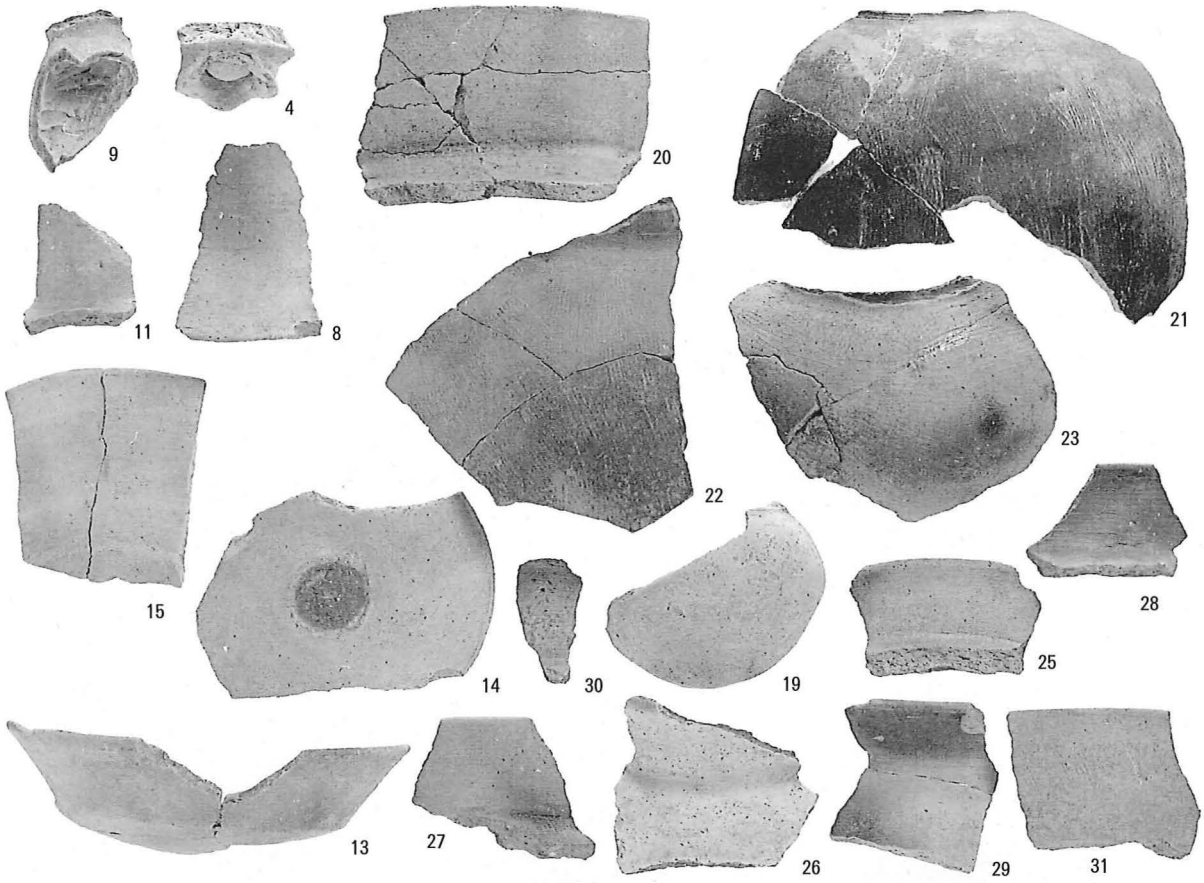




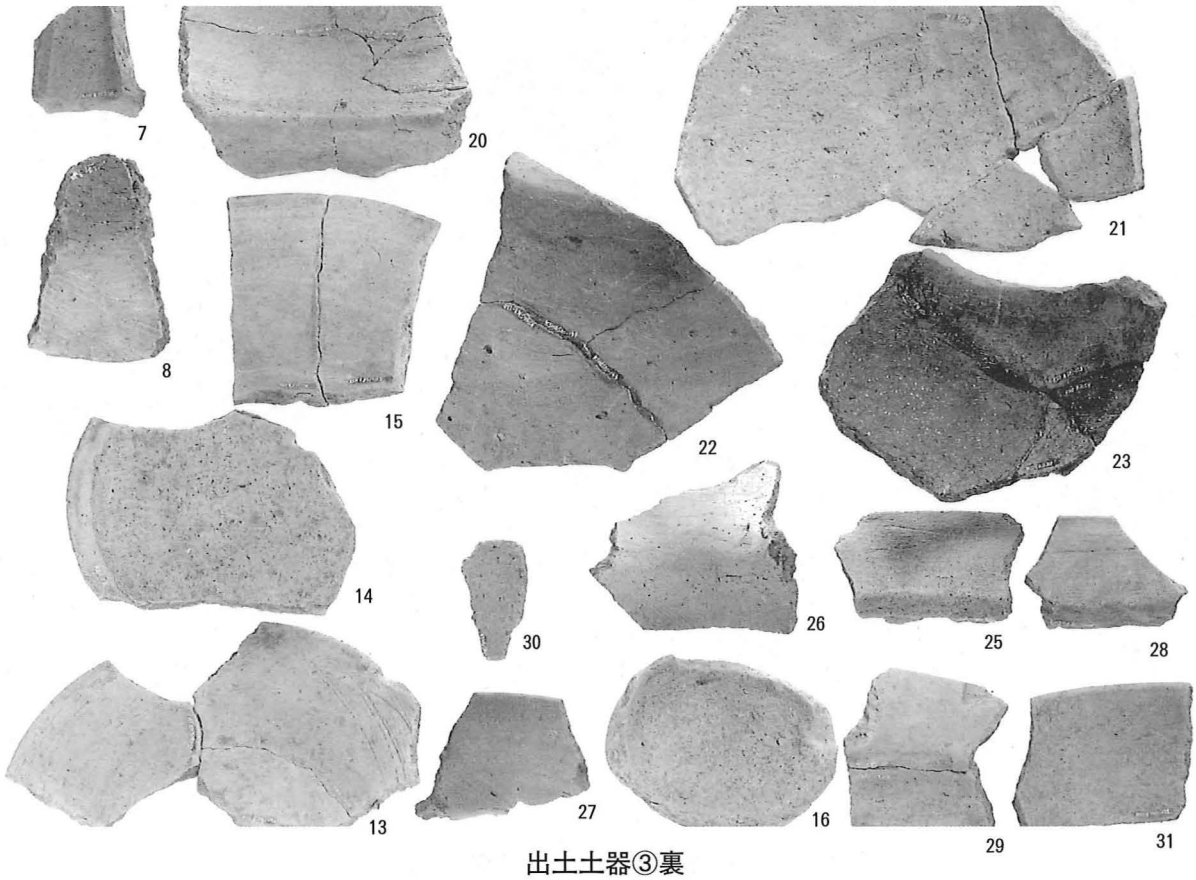


出土土器②・貿易陶磁

図版 4



出土土器③表



出土土器③裏

第II部　カラカミ遺跡（壱岐市）

例　　言

1．本書は壱岐市勝本町立石触字カラカミ・国柳・川久保に所在するカラカミ遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は長崎県教育庁学芸文化課が事業主体となり、平成15年11月17日から同年11月28日にかけて実施した。
3．調査関係者は次の通りである。
　調査担当　長崎県教育庁学芸文化課　主任文化財保護主事　古門　雅高
　　文化財調査員　　山田　英明
4．遺構の実測は調査担当者が行った。
5．遺物の実測は石器は竹田ゆかり、土器は山田が行った。トレースは山田と横田愛子、和田美加が行った。
6．本書における遺物・写真・図面は長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室で保管している。
7．本書の執筆は古門、山田が行った。
8．本書の編集は山田が行った。

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境および調査履歴
　第1節　遺跡の地理的環境……25
　第2節　遺跡の歴史的環境……25
　第3節　調査履歴……26
第Ⅱ章　調査
　第1節　調査にいたる経緯……27
　第2節　基本土層……27
　第3節　調査概要……27
第Ⅲ章　遺物
　第1節　出土遺物……30
　第2節　表採資料……30
　第3節　磨製石剣……32
第Ⅳ章　まとめ……34

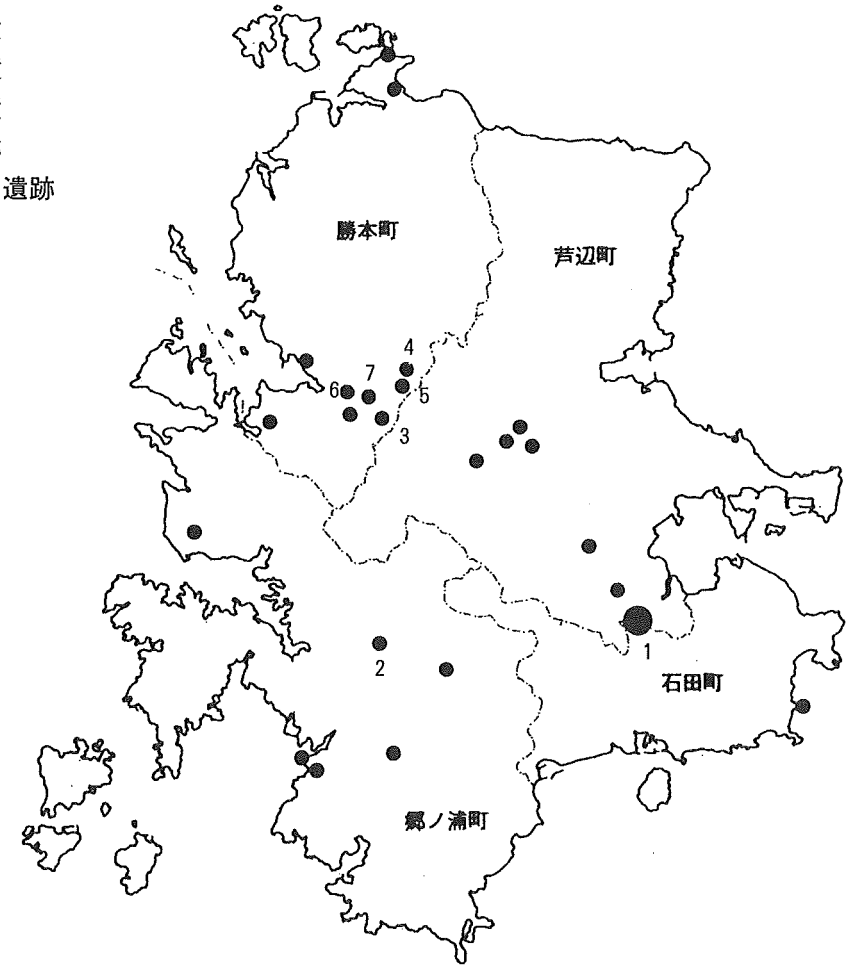
挿　図　目　次

第１図　カラカミ遺跡および周辺遺跡……25
第２図　カラカミ遺跡位置図(Ｓ=1/25,000)　……26
第３図　試掘坑配置図および過去の調査区……28
第４図　第６試掘坑遺構平面図(Ｓ=1/30)　……29
第５図　土器実測図①(Ｓ=1/4)……30
第６図　土器実測図②(Ｓ=1/2)……31
第７図　石剣実測図(Ｓ=2/3)……31
第８図　石剣部位名称図……32

図　版　目　次

図版１……54

1　原の辻遺跡
2　車出遺跡
3　双六古墳
4　掛木古墳
5　笹塚古墳
6　國柳遺跡
7　カラカミ遺跡



第１図　カラカミ遺跡および周辺遺跡

第１章　遺跡の立地と環境および調査履歴

第１節　遺跡の地理的環境（第１・２図）

壱岐は九州本土と朝鮮半島・中国大陸に挟まれた玄界灘に位置している。カラカミ遺跡は壱岐島の北西部の勝本町にある。全般的に平坦な勝本町において、本遺跡は標高約88mの香良加美神社を最高所とし、神社を中心にして緩やかに傾斜する丘稜上に位置している。周辺は畑地として利用されている。香良加美神社の周囲、半径約1.5kmが遺跡範囲に該当する。遺跡の北から西にかけては傾斜が緩やかであるのに対して、刈田院川に面する東から南にかけては急斜面をなし、天然の要害となっている。刈田川は深い谷を形成しながら西に下り、片苗湾へと流れ込む。

第２節　遺跡の歴史的環境

壱岐は対馬と同じく日本と朝鮮半島・中国大陸の交流に大きな役割を果たしてきた。３世紀の中国歴史書『魏志倭人伝』にも登場することからも、そのことがうかがわれる。

本遺跡と同じく壱岐を代表する弥生時代の遺跡として、原の辻遺跡・車出遺跡などがあげられる。

島の南東部に位置する原の辻遺跡は、幡鉾川流域に広がる平地にある大規模な遺跡で、大正から昭

和初期に学会に発表されて以来、昭和26～36年の東亜考古学会、昭和50～52年の長崎県教育委員会が調査を行った。平成３年から現在に至るまで長崎県教育委員会が主体となって調査が行われている。多重環濠や高床式建物跡と見られる柱穴群などが検出され、石器・鉄器・青銅器・木製品なども多数出土している。また朝鮮・中国に由来すると思われる出土品もあることから、『魏志倭人伝』に登場する「一大国」の王都であるとも考えられている。

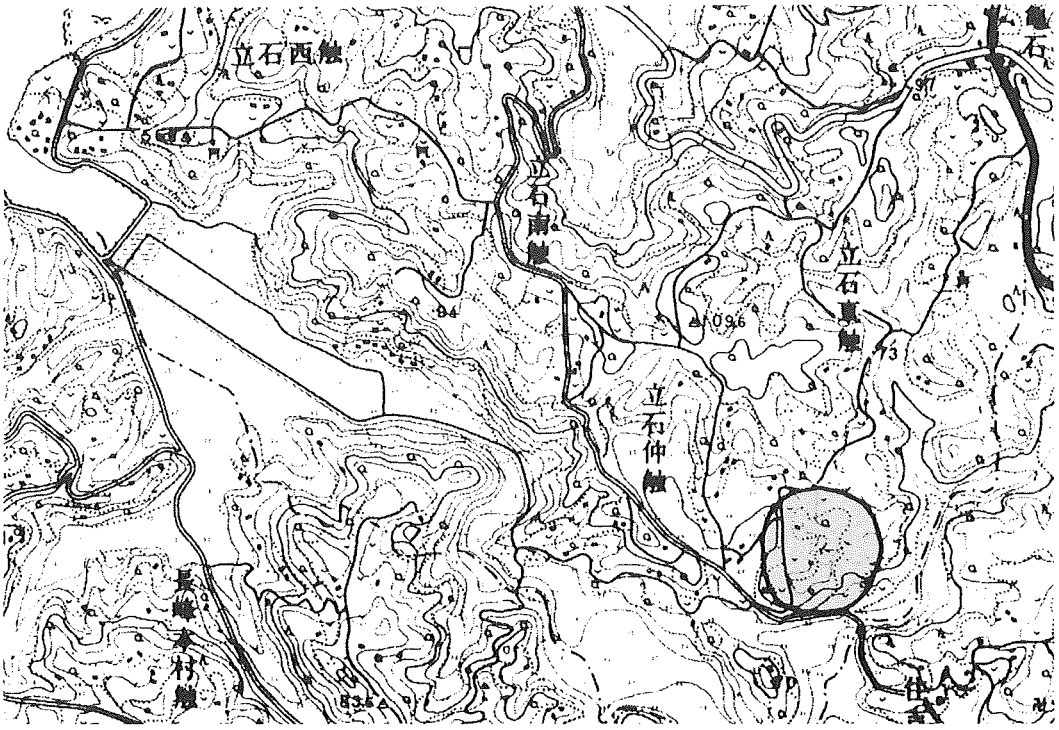
車出遺跡は幡鉾川の上流に位置し、多くの土器や石器が出土している。また中国の貨幣である貨泉や方格規矩鏡などが出土することから、原の辻遺跡との関連のある集落とも考えられている。

本遺跡の北西側には弥生時代の遺跡と思われる國柳遺跡がある。北東側のやや離れたところには掛木古墳、百合畑古墳、笹塚古墳、人羅古墳、双六古墳などの古墳群がある。

第３節　調査履歴

カラカミ遺跡は大正時代に発見され昭和初期に学会に発表されて以降、壱岐在住の松本友雄氏等に始まり、戦前には昭和10年代に鴇田忠正氏、戦後には昭和27年（1952）に東亜考古学会、昭和52年（1977）に九州大学によって調査が行われている。東亜考古学会の調査では、鯨骨製や鉄製の漁労具、朝鮮系瓦質土器、弥生中期以降の土器が出土している。出土品の特徴としては鉄製品が多いことである。九州大学の調査では、白川貝塚と称される地点において南北に走る溝が検出されている。

その後勝本町教育委員会が主体となり、二度にわたって調査が行われている。昭和57～59年（1982～84）に行われた調査では、遺跡の大まかな範囲が明らかとなっている。昭和62年（1987）の調査では、柱穴群と小児用甕棺・集石土坑が検出されている。調査期間は昭和57年度は2度行われ17日と24日の合計41日間、昭和58年度も２度行われ18日と15日の合計33日間、昭和59年度は21日で、3年間で合計95日間である。試掘坑は91カ所、約605㎡である。



第２図　カラカミ遺跡位置図(Ｓ=1/25,000)

第２章　調査

第１節　調査にいたる経緯

今回の調査は地域拠点遺跡発掘調査事業として行われた。地域拠点遺跡発掘調査事業とは、長崎県内にある約3400カ所の遺跡のうち、155カ所を重要遺跡として現状および内容を新たに確認し、保存活用のための基本資料整備を目的とするものである。

今回調査の対象となったカラカミ遺跡は、前述したようにこれまでにも発掘調査が行われてきた。しかし東亜考古学会、九州大学の行った調査については、調査成果は未発表である。そのため遺跡の概要は把握されているものの、詳細については不明な点が多い。とくに住居跡は未検出で、居住地の特定は今後の課題となっている。

第２節　基本土層（第４図）

今回調査したカラカミ遺跡の基本土層は次の通りである。なお第６試掘坑（第４図）において確認した。

第１層　表土、耕作土

第２層　整地層（客土）。地山起源の赤色、灰色の小礫を含む。
　　礫は１～２㎜と地山の礫より小さい。土質は締っている。
　　地山と誤認するほど似ているが、有機物などにより部分的に汚れている。

第３層　黄褐色粘質土。第２層の一部と思われるが、第2層（客土）が突き固められたことによって第４層（旧表土）が硬化したものかもしれない。

第４層　旧表土。弥生時代の遺構検出面である。

第３節　調査概要（第３図）

(1)　第１試掘坑

九州大学が調査した白川貝塚（第３図－D）をのせる畑の上段の畑に設定した。トレンチ設定の意図は、九州大学の白川貝塚調査の際に検出された環壕の追跡を目的とした。なおトレンチは南北方向に幅1.5m、長さ８mに設定した。

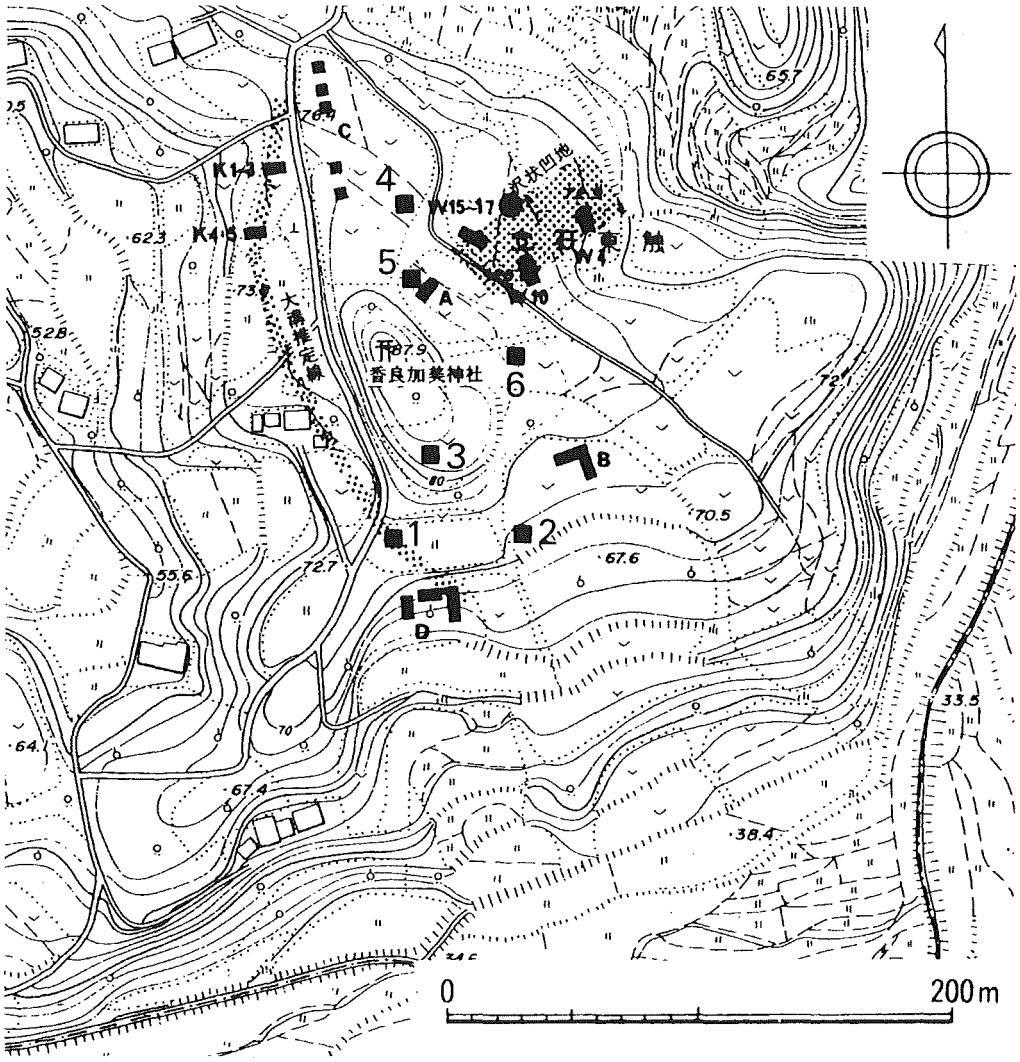
層厚10cmの表土を剥いだところ、赤褐色を主体に青色や灰色が部分的に見える玄武岩の風化土層があらわれた。またトレンチの中央北よりのところから、周囲の風化土層に比べて鉱物粒の少ない範囲が幅３mほどの帯状に検出できた。当初環壕の一部かと期待したが、その部分を掘り下げたところ、深さ５cmほどの浅い窪みであることが判明した。

そこでさらに東西方向に1.5m、長さ６mほどのトレンチを設定し、T字状になるようにした。このトレンチからは何も検出できなかった。第1試掘坑では土器の出土もなく、環壕は同畑には存在しないことがわかった。

以上の調査結果より、『原始・古代の長崎県Ⅰ』に掲載されているカラカミ遺跡の環壕の推定線は、実際はさらに西へ膨らんでまわる可能性が出てきた。

(2)　第２試掘坑

東亜考古学会が調査した辻屋敷貝塚（第３図－B）をのせる畑に設定した。畑の西端に２m×２m



第３図　試掘坑および過去の調査区

の試掘坑を設定した。表土下15cmより暗褐色の玄武岩風化土層が表れた。近接する切り通しで確認したところ、地山にいたる漸移層であることがわかった。遺構や出土遺物はなかった。

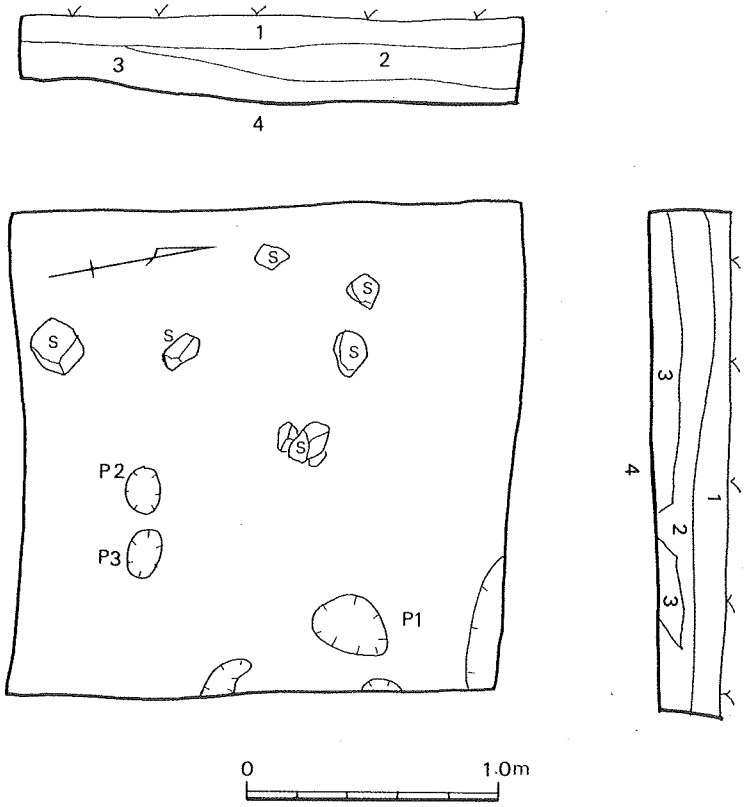
(3)　第３試掘坑

カラカミ神社の南に隣接する畑の南端に２ｍ×２ｍの試掘坑を設定した。表土下20cmほどで地山にいたった。遺構、出土遺物もなかった。カラカミ神社をのせる丘陵上に位置するが、畑地を作る際に削平された可能性が高い。

(4)　第４試掘坑

九州大学が調査したＣ地点付近に設定した（第３図参照）。調査地は周囲の畑よりも低く、Ｕ字状の窪地に広がっている。この落ち込みが人工的なものか自然のものかを判断すべく、トレンチを設定した。設定場所は、昭和62年度（1987）の調査において甕棺などが出土した立石東触に近いところに設定した。

調査の結果、旧地形は自然の落ち込みであり、後世になって重機により地形を改良し、地山を切り



第４図　第６試掘坑遺構平面図(Ｓ=1/30)

込んで平坦な畑を造成したものと判断した。付近には土器の出土もなく、地山に穿った遺構も検出できなかった。

過去の調査で立石東触にて沢状の窪地が検出されているが、旧地形はそれに続く沢状の窪地である可能性も考えられる。

(5)　第５試掘坑

東亜考古学会が設定した小川貝塚（図３－Ａ）をのせる畑を設定しようとしたが、当該地は墓地の予定地となっており、すでに整地済みのところであった。調査については地権者の同意を得ていたが、調査予定地は突き固めてしっかりと整地されていた。その状況からして調査後の原状回復は困難と判断し、調査を回避することとした。

(6)　第６試掘坑（第４図）

小川貝塚をのせる畑の隣接地に設定した。現在の耕作土下に地山の玄武岩風化土に類似した粘質の客土（層厚10cm）をのせ、畑を平滑にしている。

客土をはずすと旧耕作地があらわれた。粘質土ではあるが、軟らかく、ピット３基を検出した。そのうちＰ２、３は耕作土ないし整地層より掘り込まれた遺構である。Ｐ1は内部より弥生時代後期の壷形土器の口縁部が出土し、時期は弥生時代後期ないしはそれ以前と思われる。

第3章　遺物

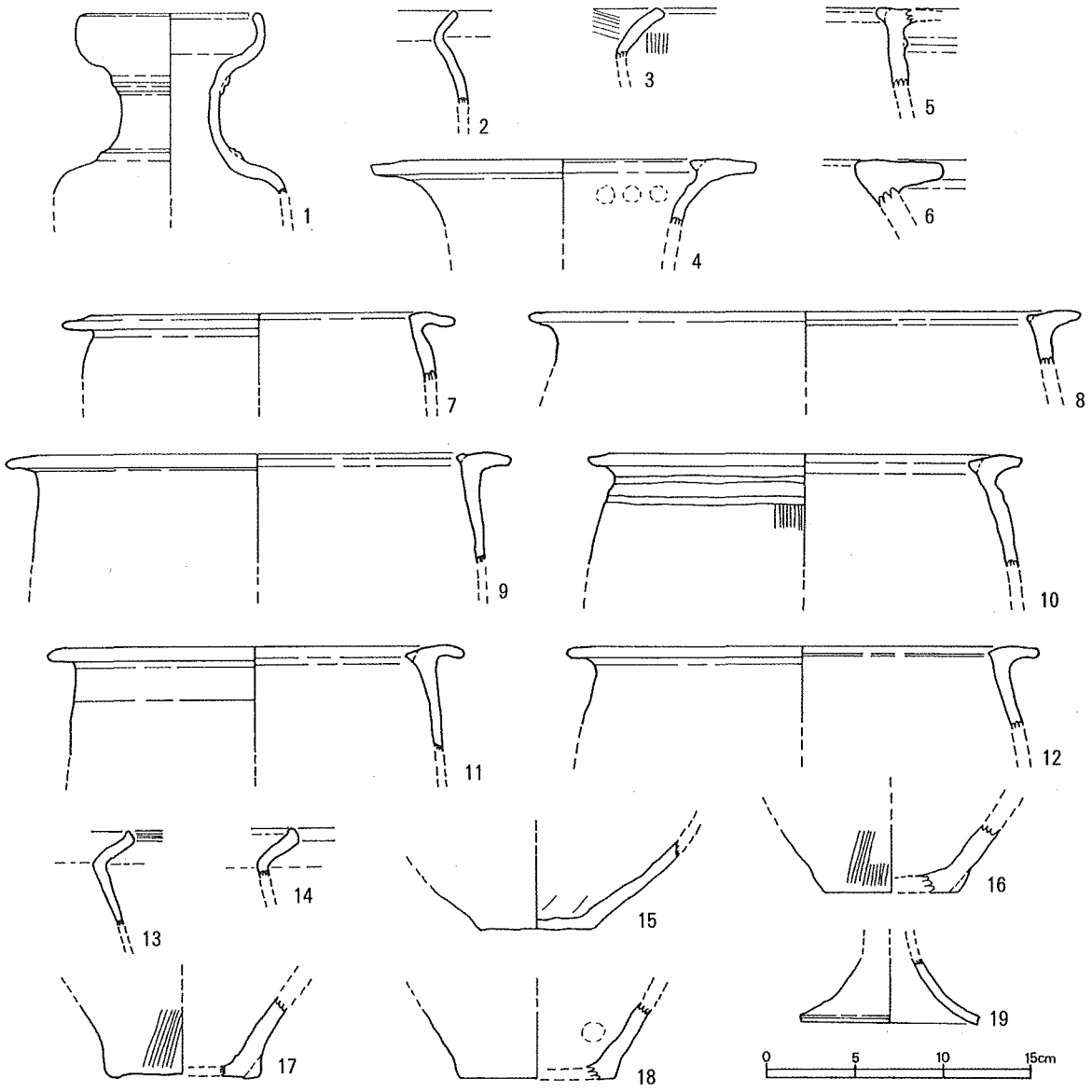
第1節　出土遺物

第6試掘坑以外での遺物の出土はなかった。第6試掘坑においても前述した壷形土器の口縁部以外は、小さな土器片が少量出土したのみだった。壷形土器に関しては第2節で述べることにする。

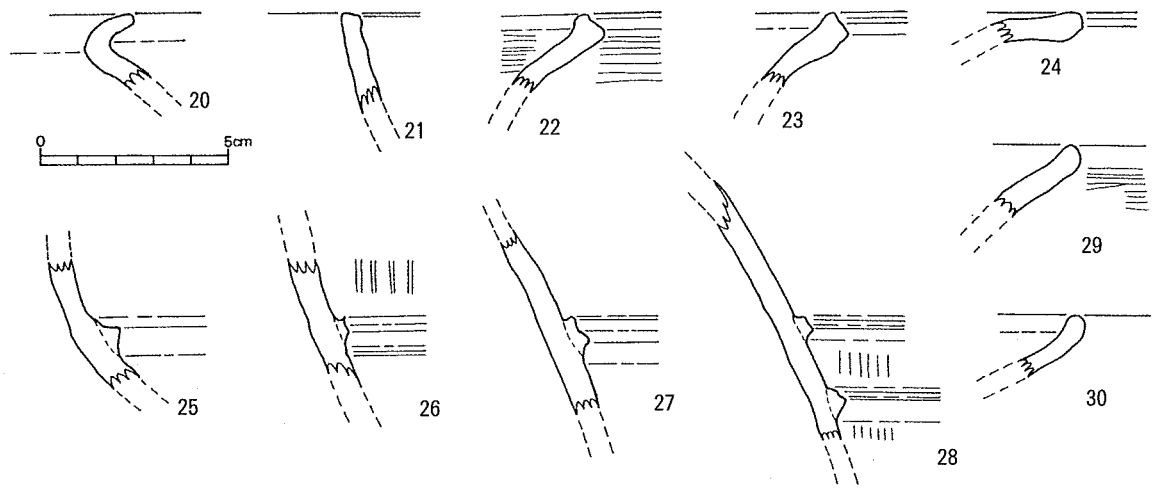
第2節　表採資料（第5・6図）

東亜考古学会が調査した辻屋敷貝塚をのせる畑の下段に位置する畑より、遺物を表採した。この畑がタバコ栽培のためトラクターによって掘り起こされたときに、同時に多くの遺物も掘り起こされていた。弥生土器がほとんどだったが、磨製石剣片も採集した。磨製石剣に関しては、第3節で述べることにする。

1～4・20・21は壷形土器である。1は袋状口縁壷で、口縁下、肩部に断面M字突帯が1条ずつ



第5図　土器実測図①(S=1/4)



第６図　土器実測図②(Ｓ=1/2)

ついている。２は第６試掘坑から出土した壷で、砂粒を多く含んでいる。３は弥生時代後期の壷と考えられるが、口縁部のみのため断定できない。４は口縁部がやや垂れ下がりながら広がっている。頸部にかけて膨らまずにすぼまっていく。内側には指圧痕が見られる。20は小頸壷の口縁部である。21は口縁部が湾曲していないことから、直口壷の可能性もある。内外に丹塗りを施し、丁寧に磨かれている。

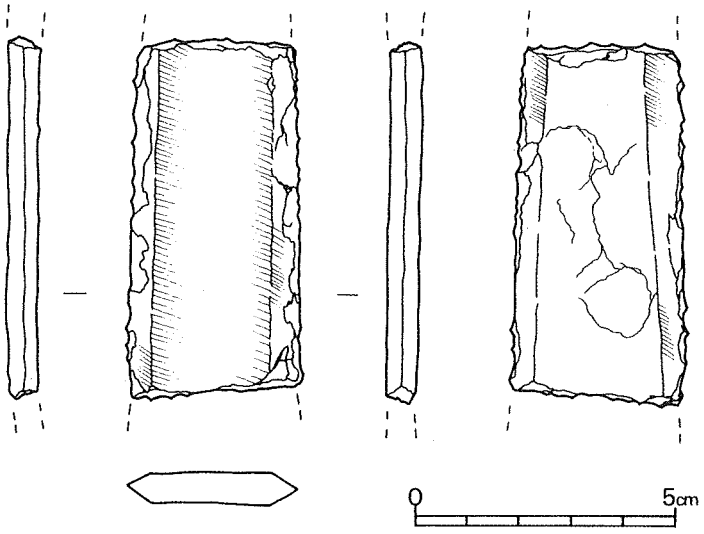
５～14、22～24は甕形土器である。５は口縁部の下に断面三角突帯が１条ついている。７～12は口縁部が垂れ下がっている。13、14、22、23は口縁部の端の部分がつまみ上げられている。24も同じくつまみ上げてあるようにも見えるが、同様のものと考えるのは難しく、口縁部だけのため器形が判断できない。14以外は口唇部に１ないし２本の沈線がある。

15・16は壷型土器の、17・18は甕型土器の底部である。15は他と比べてしっかりと焼かれている。16・17は外側に縦方向にヘラ削りの跡がある。17は底部に脚のようなものがついて少し浮いている。18は内側に指圧痕が見られる。

19は高坏の脚部である。外側は丹塗りが施され、磨かれている。

25は壷形土器の肩部である。断面三角突帯が１条ついている。壷は橙色だが、突帯はにぶい橙色と違った色調になっている。

26～28は甕形土器の胴部である。27・28は丹塗りが施され、磨かれている。26にもわずかだが丹塗りが施されて形跡がある。26・27には1条、



第７図　石剣実測図(Ｓ=2/3)

28には2条の断面M字突帯がついている。

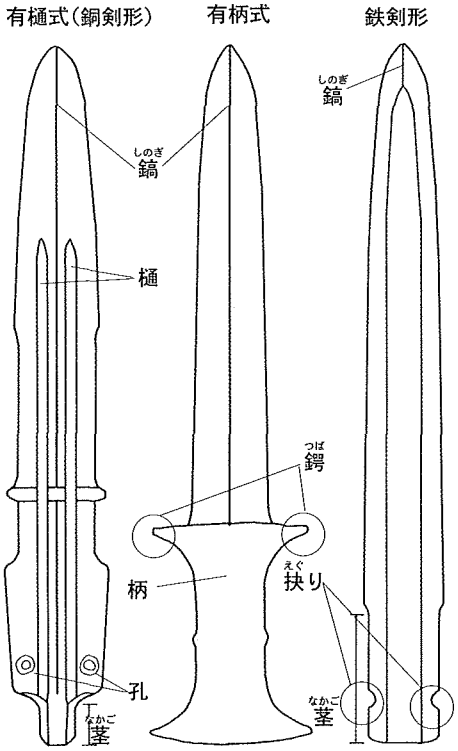
29・30は土師器片であるが、口縁部のみのため器形は不明である。

第3節　磨製石剣（第7・8図）

磨製石剣は縄文時代晩期から存在するが、弥生時代の特徴的な遺物の一つとされている。これは金属器が現れる前に使用したものではなく、金属器の供給が満足ではなかったことから石で模倣して代用ものといわれている。長崎県内において「青銅器の出土する地域と磨製石剣の出土する地域が一致する」（高野1978）ことからも、その関連性がうかがわれる。またそのことから金属器と磨製石剣の用途は一致する部分が多いと考えられる。

磨製石剣は有樋式、有柄式、鉄剣形の大きく3つに分類される（註1）。

まず有樋式は、二条の樋（註2）が最も大きな特徴である。銅剣を模倣した外形であることから銅剣形とも呼ばれている。また下部には短い茎があり、その上に左右一対の孔をあけるものもある（註3）。時期は弥生時代中期後半とされている。近畿を中心に分布し、県内や北部九州での出土例はない。



第8図　石剣部位名称図

次に有柄式である。鍔のついた柄を持ち、国内出土品は樋を持たない。柄に段がつくものは古く、新しくなるにつれて段が無くなると考えられている。北部九州、対馬を中心として分布し、四国や畿内でも少ないが出土が確認される。対馬においては墳墓の副葬品としての出土例がある。時期は縄文時代晩期から弥生時代前期とされている。

最後に鉄剣形だが、名前が現わすように鉄剣と同じ形で、出土例が最も多い（註4）。中央に鎬を持ち、断面が菱形で茎がある。また中央の鎬がない断面が細長い六角形のもの（註5）や、茎が明確でないものも存在する。基部に抉り（註6）を入れるものもある。分布地は北部九州を中心で、近畿や関東にも広がりを見せる。時期は縄文時代晩期末から弥生時代中期後半とされている。また近畿などでは弥生時代中期後半以降である。

有樋式、有柄式は主に祭祀用と考えられている。それに対して鉄剣形は、大型のものに関しては祭祀用とされているが、ほとんどは武器として用いられた形跡がある。有柄式が完形に近いものが多いのとは対照的に、鉄剣形は刃部が欠損したものや原形をとどめていないもの、再加工に用いたと思われるものが確認されることから、そう考えられる。

有柄式と鉄剣形の起源は、朝鮮半島でも出土が確認されていることから、朝鮮半島にあるとされている。そして金属器や稲作技術とともに持ち込まれたと考えられている。

これに対して有樋式は、日本独自のものとされている。時期が遅く、近畿中心の分布は他と異なる。

また有柄式が近畿でも少ないが確認されているにもかかわらず、祭祀用として新たに作っていることからも、そう考えられる。

長崎県内では朝鮮半島と結びつきが強い対馬を中心として、壱岐や県北地域に多く出土する。また諫早市、小長井町の県央地域にも出土例がある。

対馬では県内で唯一有柄式が出土し、前述したように副葬品としての出土例もある。このような磨製石剣の墳墓への副葬は、朝鮮半島の同時代の墳墓にも見られ、その影響があるとも考えられる。また対馬出土の磨製石剣が、朝鮮半島で作られたものもあるとも考えられている。

壱岐では原の辻遺跡でのみ出土が確認され、出土品数は多い。出土品は鉄剣形で、鎬があるものと無いものが近い割合で見られる。石戈も出土しているため、鎬がなく基部が欠損したものは、石戈の可能性もある。また欠損品が多いことから、武器として用いたものと考えられる。

今回出土した磨製石剣（第７図）は、長さ6.8cm、幅3.3cm、厚さ0.6cmの頁岩製である。鎬がないため、断面は細長い六角形である。刃部の幅は狭く、剥離が見られる。先端部と基部が欠損しているために、全体の形状はわからない。片面は丁寧に研磨されているが、もう片面は剥離が見られ、残った部分も丁寧に研磨しているようではない。上下の欠損部は直線的であることから、武器使用時の欠損ではなく、石鏃などへの転用のために意図的に折ったものかもしれない。原の辻出土品に見られるような石戈の可能性もあるが、幅がほとんど一定であることや厚みがないことから、その可能性は低いと思われる。

カラカミ遺跡においても昭和40年代に神社近辺で出土し、個人宅に保管されているという。過去の調査において砥石などは数多く出土しているが、石庖丁などは数点にすぎない。また青銅器の出土も少ない。さらに今回の遺物は表採遺物である。このようなことから情報量が少ないために特徴や用途を判断できず、また原の辻遺跡の出土品との関連性を見つけることも困難である。

【註】（註１）朝鮮半島では有樋有柄式などが出土していることから、それぞれが全く別の形式というわけではない。

（註２）付着した血を流すために作られている。

（註３）茎は別に作った柄を装着するためのものであり、孔は柄としっかり縛るためのものである。

（註４）大きさや形態によっては石鏃・石槍との区別が困難なものもある。また欠損したものを転用して、石鏃にしたものもある。

（註５）この形態は石戈に多く、基部や先端部が欠損したものは判別しにくいものもある。

（註６）柄をしっかりと結びつけるために作られる。有樋式に見られる左右一対の孔と同じ用途である。茎に抉りを入れるものもあるが、茎が不明確なものによく見られる。

両側にあるものと片側のみのものが存在する。

第4章　まとめ

カラカミ遺跡は一支国の王都である原の辻遺跡と並ぶ壱岐の代表的な弥生時代の集落遺跡である。しかし、両遺跡は立地や遺跡の特徴などが大きく異なる。原の辻遺跡は深江田原と呼ばれる平野に突き出す独立した低丘陵上とそれに隣接する低地に位置し、多重の環濠をもつ極めて人工的で、政治的な意図をもってつくられた集落である。一方、カラカミ遺跡は自然発生的な集落とみられ、出土遺物も漁撈具が多いというきわめて壱岐島的な遺跡といえよう。

カラカミ遺跡は数度の学術調査がおこなわれているが、正規の報告書は刊行されていないため、遺跡の詳細については明らかではない。県教委の調査でも報告書が写真集的なものであったことが悔やまれる。

また、カラカミ遺跡ではこれまで住居跡が検出されていなかったので、祭祀を中心とした遺跡ではないかとの意見もある。今回の調査では住居跡の検出も意図していたが、発見までにはいたらなかった。しかし、第6試掘坑で検出したピットなどからみて、香良加美神社の北東に位置するこの場所付近が居住域の候補地のひとつではないかと推定される。眼下には甕棺墓が出土した地区を見ることができ、北西の季節風も防ぐことができる場所である。

一方、環濠については香良加美神社のある丘陵の西側に確認されており，そこからは弥生土器や石器をはじめ，卜骨（ぼっこつ）や，三韓土器，楽浪系土器などが出土している。今回の調査で、これまでの環濠推定線より、西に振れることが判明した。最近、九州大学が発掘し、丘陵の東側をめぐる環濠が検出されている。

なお、耕作中の畑より、多くの土器片と磨製石剣片を採集した。内容については本書で紹介したとおりである。今後の保存の施策が望まれる。

【引用参考文献】

高野晋司1978「小野古墳」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ』長崎県埋蔵文化財調査報告書第35集　長崎県教育委員会

小田富士雄1983「磨製石剣」『九州考古学研究　弥生時代篇』学生社

勝本町史編纂室1985「勝本町史　上巻」勝本町

正林護・宮崎貴夫1985「カラカミ遺跡」勝本町文化財調査報告書第3集　勝本町教育委員会

長沼孝1986「磨製石剣・石戈」『弥生文化の研究　第9巻』 雄山閣

正林護・宮崎貴夫1988「カラカミ遺跡」勝本町文化財調査報告書第6集　勝本町教育委員会

下条信行1991「西日本－第Ⅰ期の石剣・石鏃」『日韓交渉の考古学　弥生時代篇』六興出版

宮崎貴夫1996「カラカミ遺跡」『原始・古代の長崎県　資料編Ⅰ』長崎県教育委員会

安楽勉1998「車出遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第8集　長崎県教育委員会

中須賀真美2000「國柳遺跡」勝本町文化財調査報告書第9集　勝本町教育委員会

中尾篤志・小玉友裕2004「原の辻遺跡」『原の辻調査研究事業報告書』原の辻遺跡調査事務所調査　報告書第28集
長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

図　　版

第 6 試掘抗

石剣

第Ⅲ部　橘遺跡（五島市）

例　　言

1．本書は五島市下大津町字五社の上に所在する橘遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は長崎県教育庁学芸文化課が事業主体となり、平成16年３月１日から同年３月12日にかけて実施した。
3．調査関係者は次の通りである。

調査担当	長崎県教育庁学芸文化課	主任文化財保護主事	古門　雅高
		文化財調査員	山田　英明
調査協力	五島市教育委員会		松崎　義和

4．今回の調査地の土地所有者は大坪トシ子氏である。発掘を許可していただきましたことに感謝いたします。
5．遺構の実測は調査担当者が行った。
6．遺物の実測は石器は竹田ゆかり、土器は山田が行った。トレースは山田と横田愛子が行った。
7．本書における遺物・写真・図面は長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室で保管している。
8．本書の執筆は古門、山田が行った。
9．本書の編集は山田が行った。

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境および調査履歴
　第１節　遺跡の地理的環境……43
　第２節　遺跡の歴史的環境……44
　第３節　調査履歴……44
第Ⅱ章　調査
　第１節　調査にいたる経緯……45
　第２節　基本土層……45
　第３節　調査概要……45
第Ⅲ章　遺物……48
第Ⅳ章　まとめ……50

挿　図　目　次

第１図　橘遺跡位置図(Ｓ=1/25,000) ……43
第２図　橘遺跡周辺の遺跡(Ｓ=1/25,000) ……44
第３図　土層図(Ｓ=1/30) ……46
第４図　試掘坑配置図(Ｓ=1/400) ……47
第５図　第5試掘坑遺構平面図(Ｓ=1/40) ……48
第６図　土器実測図(Ｓ=1/3) ……49
第７図　石器実測図(Ｓ＝2/3) ……49

図　版　目　次

図版１ ……54

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境および調査履歴

第１節　遺跡の地理的環境（第1図）

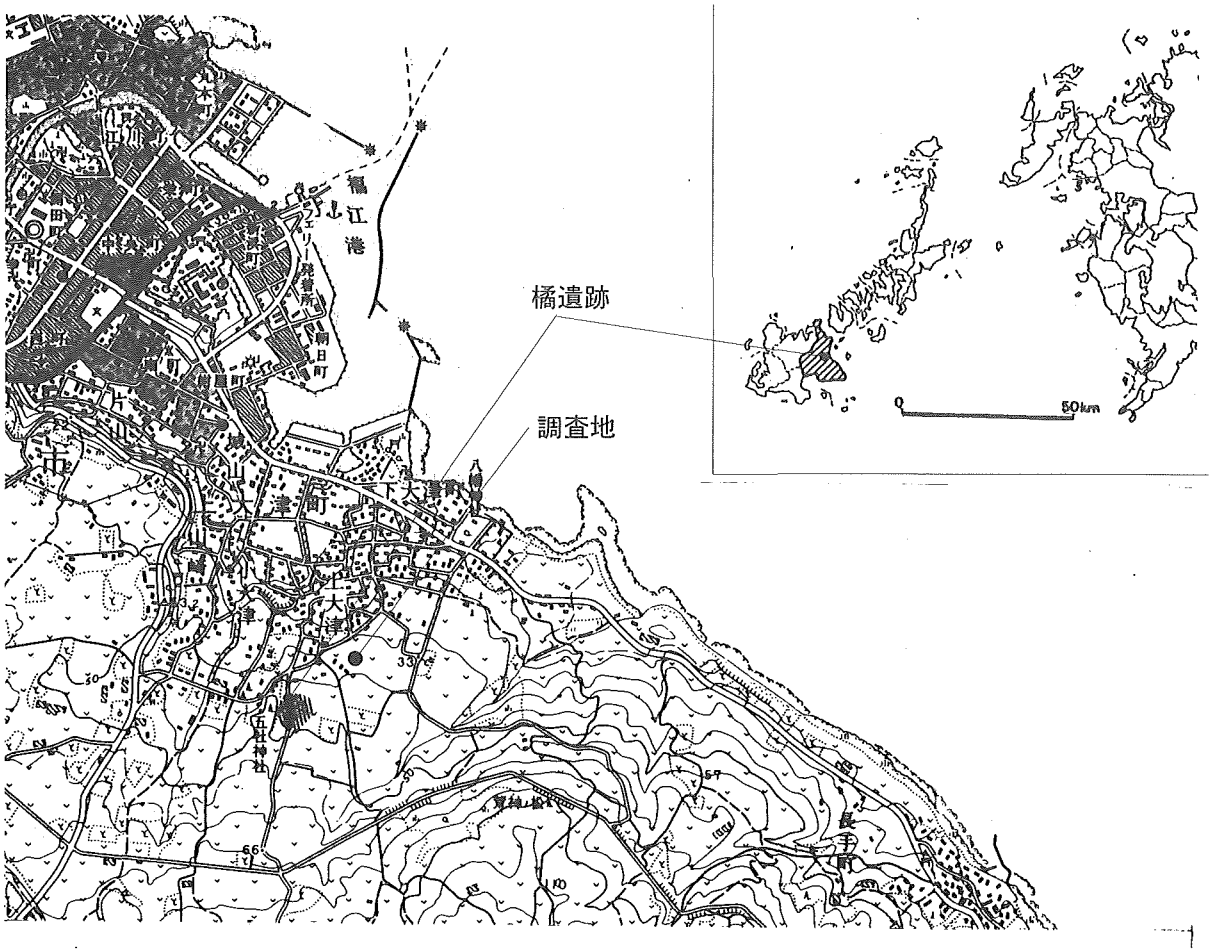
五島市がある福江島は、九州の西の海上にある五島列島の南部に位置し、西方には東シナ海があり中国に近いことから、遣唐使の港として利用していた。

橘遺跡は福江島東部の福江港から南東方向にある段丘上に位置し、標高は30～40mほどである。橘遺跡をのせる段丘は、鬼岳火山群が形成した溶岩台地が浸食されてつくられたものであり、海岸から２ないし３段の段丘面の先端に位置する。

今回の調査地は、九州大学が調査した橘遺跡が立地した段丘面から１段下がったところで、厳密には橘遺跡の範囲には含まれていない。隣接する遺跡に一本木遺跡があり、調査地は橘遺跡と一本木遺跡の中間に位置するといえる。

遺跡周辺の地質については、長岡信治氏の論攷に詳しく述べてある（長岡1993）。それによると、周囲の地質は基盤の玄武岩とそれを覆うローム層堆積物からなり、すべて陸成層と判断されるという。このローム層は隣接する一本木遺跡の調査などから、１万年以前から3000年前にかけての鬼岳や火の岳の活動に伴うテラフに対比されるという。

橘遺跡周辺は現在畑地となっており、タバコや野菜栽培がおこなわれている。しかし以前と比べると休耕地が多くなっており、今回の調査地も荒れ地であった。



第１図　橘遺跡位置図(Ｓ=1/25,000)

第２節　遺跡の歴史的環境（第２図）

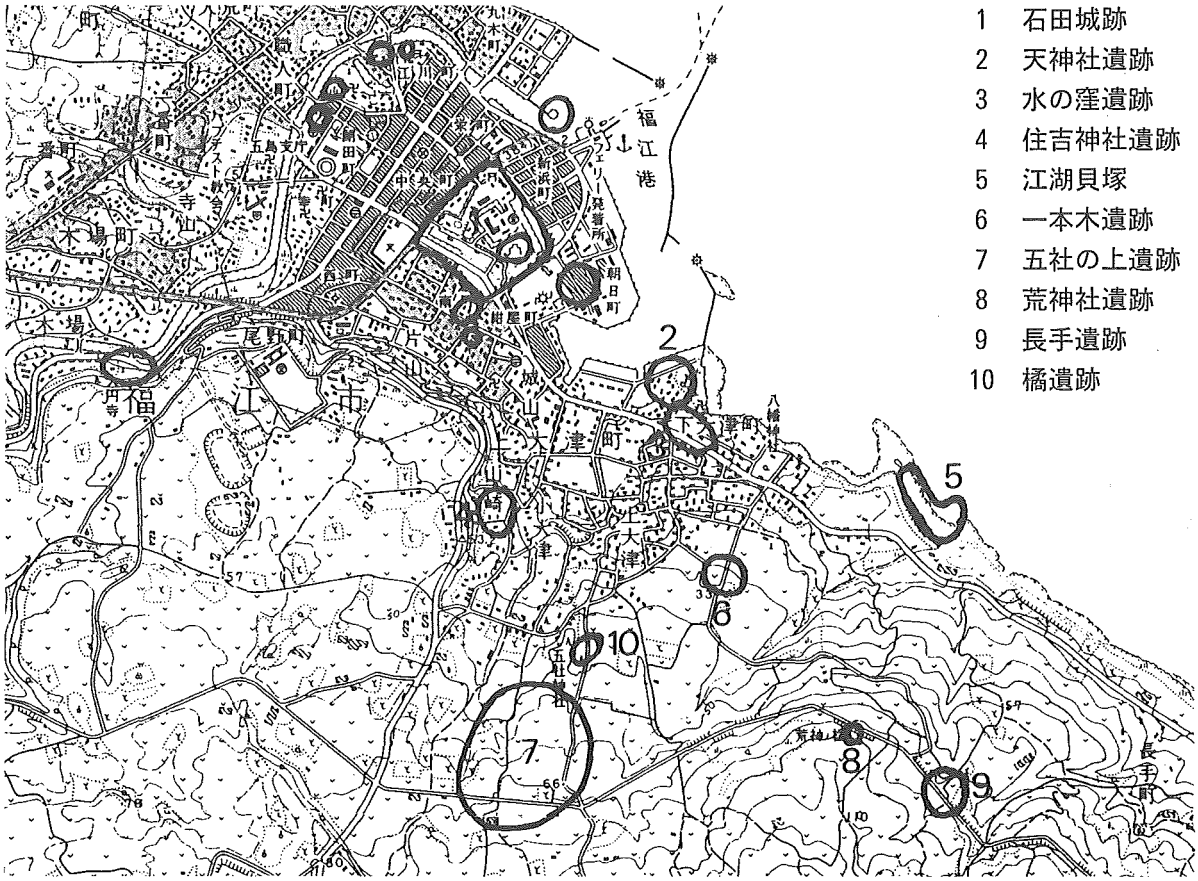
一本木遺跡はこれまでに２度調査がおこなわれ、弥生時代中期から後期を中心とした土器が出土した。昭和54年度の調査では、弥生時代後期と思われる合わせ口の甕棺が出土し、中から210個ほどのガラス玉が副葬してあったことを確認している。また平成４年度の調査では、弥生時代の集石墓が県内で唯一確認されている。

南西方向には、九州大学が実施した橘遺跡の調査地点がある。そこからやや南には縄文時代の遺跡の五社の上遺跡がある。また海岸の方へと下ると、同じく縄文時代の遺跡である水の窪遺跡がある。ここは五島列島の遺跡では珍しく、漁労に関する遺物がほとんど出土していない。

第３節　調査履歴

橘遺跡は早くから高地性段丘の遺跡として知られていた。この土地の開墾にあたって土器や石器が採集されていることから、昭和45年（1970）九州大学による試掘がおこなわれ、弥生時代終末期の土器が出土した。この調査において広大な範囲と多量の出土遺物を確認し、加えて日本最西端の高地性集落であると認識したことから、昭和48年（1973）に文部省科学研究費による総合研究「弥生系高地性集落跡の研究」事業の一環として発掘調査をおこなった。

この調査において、主に弥生時代終末期の土器が出土し、最古式土師器も同時に出土した。耕作に使ったと思われる偏平打製石斧も出土している。また隅丸方形に近い竪穴や、柱穴と思われるものも検出されている。



第２図　橘遺跡周辺の遺跡(Ｓ=1/25,000)

第II章　調査

第1節　調査にいたる経緯

今回の調査は地域拠点遺跡発掘調査事業として行われた。地域拠点遺跡発掘調査事業とは、長崎県内にある約3400カ所の遺跡のうち、155カ所を重要遺跡として現状および内容を新たに確認し、保存活用のための基本資料整備を目的とするものである。

橘遺跡は前述したように、九州大学による発掘調査が2度実施されているが、正規の報告書は刊行されていない。またその後は全く調査がおこなわれていない。そのため遺跡の概要は把握されているものの（小田1979)、詳細については不明な点が多く、遺跡の範囲確定までは至っていない。

第2節　基本土層（第3図）

今回調査した橘遺跡の基本土層は次の通りである。

第1層　表土および耕作土である。弥生土器や陶磁器の細片を含む。

第2層　赤褐色礫を含まない褐色粘質土である。

第3層　最大径2㎜の赤褐色礫を含む褐色粘質土である。

第4層　黄褐色粘質土で、本遺跡の地山にあたる。

第5層　玄武岩の礫群である。基盤の玄武岩層起源と思われる。

北西になるにつれて第2層は著しく深くなるが、第3層は他の場所よりやや厚みがあるものの、一定の厚みを保っていた。また東側では、表土直下に第5層と思われる礫群が確認される場所もあり、場所によって層位に大きな違いが確認された。

第3節　調査概要

今回の調査では、全体で9ヶ所の試掘坑と2ヶ所のサブトレンチを設定した（第4図)。試掘坑は2m×2m、サブトレンチは1m×3mの大きさである。

(1)　第1試掘坑、第9試掘坑

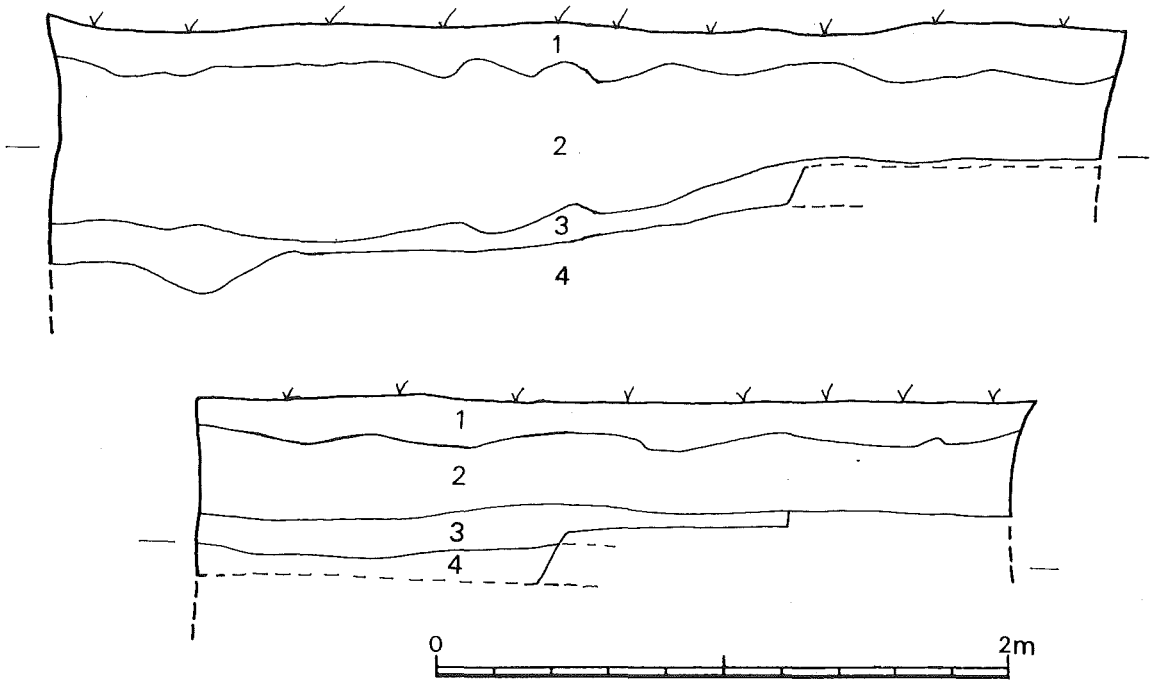
調査区の北西の第1試掘坑では、第2層が厚く堆積しており、層厚は約60cmである。この層からは弥生時代後期の土器片や貿易陶磁器片が出土した。今回出土した弥生土器のほとんどが、この層から出土している。

赤褐色礫を含む第3層は表土より約75㎝下から、第4層は約90cm下から確認された。この状況は他の試掘坑とは大きく異なっていた。そこで第9試掘坑を南西に、サブトレンチを南北にそれぞれ1本ずつ入れて、旧地形を探ることにした。

その結果、第1試掘坑の深みは第9試掘坑で検出した第3層の落ち込みから判断して、自然地形によるものと判断した。当初、環壕の可能性も考えたが、自然の落ち込みに弥生土器、須恵器、貿易陶磁が流れ込んでいると結論づけた。

(2)　第2試掘坑

第2試掘坑は調査地の南西に設定した。表土を剥がすと、薄い第2層と第3層があらわれた。その下の第4層も薄く、さらに下から玄武岩礫があらわれた。



第３図　土層図(Ｓ=1/30)（上：第１試掘坑　下：サブトレンチ1）

(3)　第３試掘坑、第４試掘坑

調査地の東側に設定したこの2ヶ所では、表土直下より礫群が出土した。第3試掘坑で掘り下げてみたが、同じ状態が続いたことから、第4層の下の礫層は基盤層起源の礫群と判断した。したがって、調査区の東側は基盤の玄武岩層が高くなっていることがわかった。

(4)　第５試掘坑（第５図）

ここでは表土直下に第４層が現れた。その第４層には近世の耕作痕と思われる溝状の跡が多数確認された。それを除くとピットが５基、溝が１条検出された。溝は深くなく、東西方向に大きく曲がりながらのびている。時期は不明であるが、溝に切られる形で検出されたピットがあることから、ピットよりも新しい時期に作られたことがわかる。第５層まで切り込んでおり、溝の作成時にでた礫を再度、溝に投げ込んでいる状況と考えられる。

検出されたピットが建物の柱穴の可能性もあるため、試掘坑を拡張して追跡した。しかし大きさや深さが一定ではなく、まとまっては検出されず規則性も確認できなかったので、建物跡ではないと判断した。

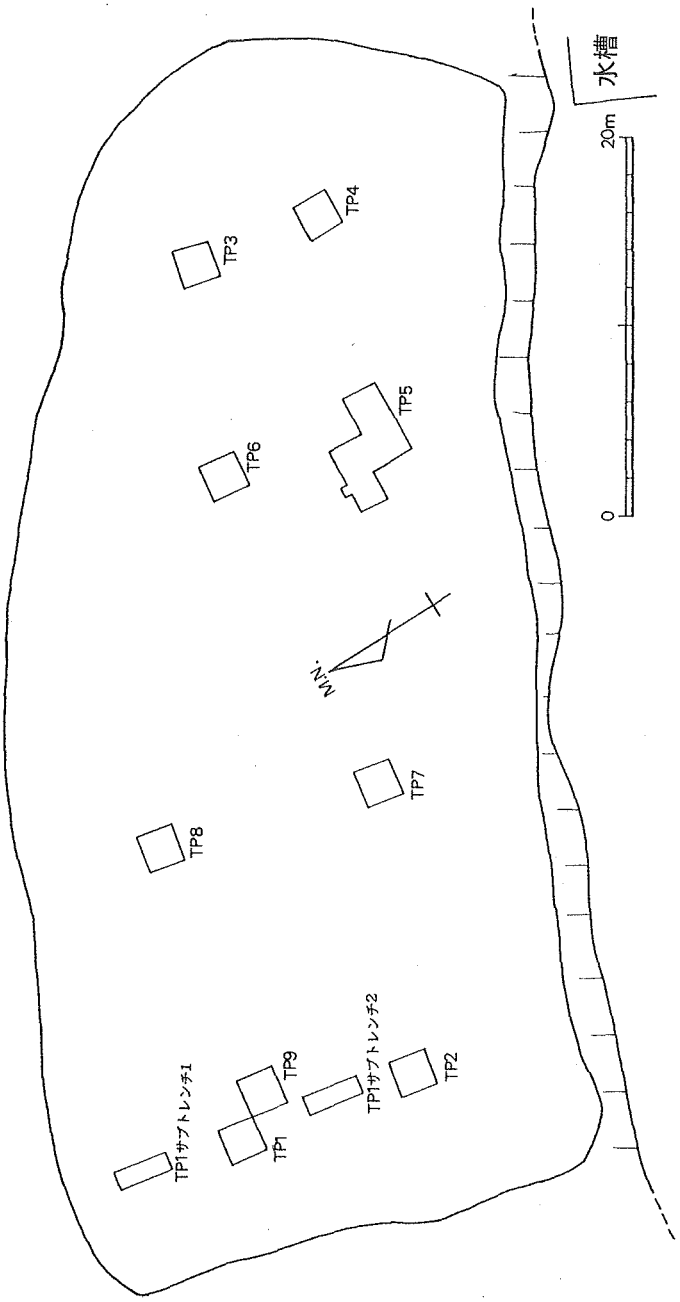
(5)　第６試掘坑、第８試掘坑

第６試掘坑、第８試掘坑は中央北寄りに設定した。第２試掘坑同様、第２層から第４層までは薄く、下からは５層があらわれた。出土遺物は数点の弥生土器、陶磁器片、黒曜石片である。

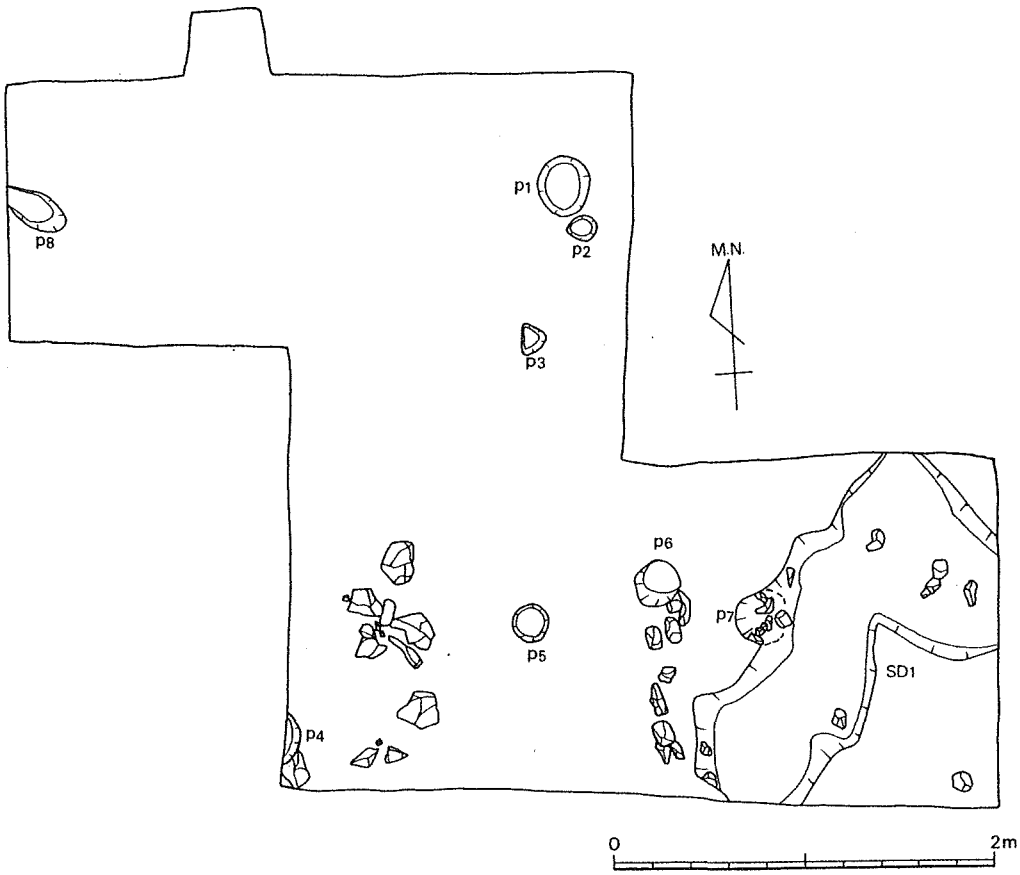
また表土下には第５試掘坑で確認されたような細い溝状の跡が、多く確認された。

(6)　第７試掘坑

第２試掘坑、第５試掘坑の間に設定した。ここでも表土直下に礫群が現れたため、第３試掘坑、第4試掘坑と同様と判断し、その時点で中止した。



第４図　試掘抗配置図（S＝1/400）



第５図　第5試掘坑遺構平面図(Ｓ=1/40)

第Ⅲ章　出土遺物

主に第１試掘坑から出土した。出土遺物は第２層から出土した弥生土器が多く、表土面から貿易陶磁なども出土した。第１試掘坑以外からの出土はほとんど無かった。

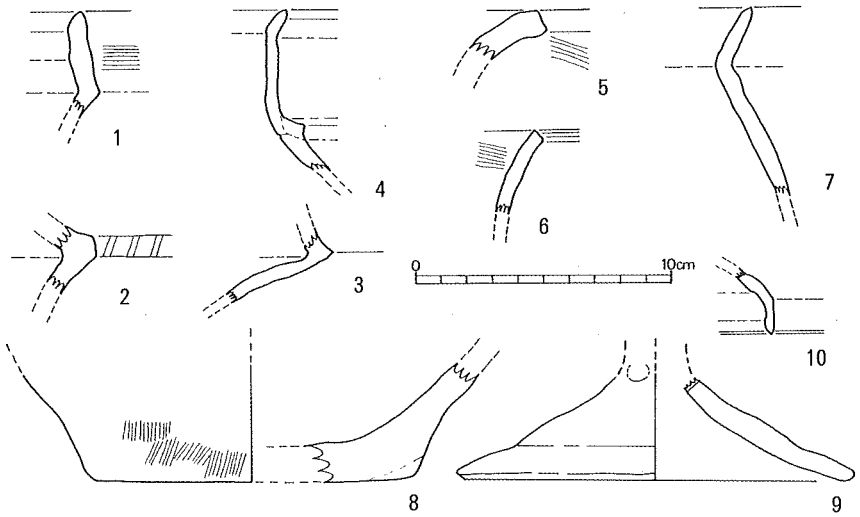
(1)　土器（第６図）

１～９は弥生時代後期の土器であり、いずれも第１試掘坑から出土した。胎土は砂粒が多く、金雲母を含む。

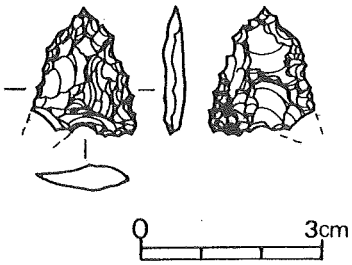
１～３は複合口縁壷である。１は口縁部がほとんど垂直に立ち上がる。色調は明黄褐色である。２は屈曲した部分の外面が角張らず、そこに刻目がある。色調は明赤褐色である。３は肩部から大きく開きながら、途中から内側に大きく屈曲する。他の２つと比べると厚みがない。色調は外が浅黄橙色、内が灰黄褐色である。

４は長頸壷である。口唇部は外側に開き、肩部に断面三角突帯がついている。内面には頸部と肩部をつないだ跡が見られる。頸部をつけた後に突帯をつけている。焼成はやや緩く風化が激しい。色調は橙色である。

５、６は口縁部のみであるため全体の形はわからないが、壷の口縁部と思われる。５は口唇部に近づくにつれて、湾曲が大きくなっている。外側には段がついているようになっている。摩滅している



第６図　土器実測図(Ｓ=1/3)



第７図　石器実測図(Ｓ=2/3)

ためはっきりはわからないが、口唇部に沈線があったと思われる。

6は口唇部に浅い沈線が見られる。色調は5は橙色、6は明褐色である。

7は甕の口縁部である。胴部まであり、頸部の下に少しふくらみがある。表面の風化が激しいためわかりにくいが、突帯ではないと思われる。色調は外が灰褐色、内が明黄褐色である。

8は甕の底部である。底部は丸みを帯びている。外面は叩き目が見られ、内面はナデ消しが施されている。これのみ胎土に角閃石を含む。底径は12.4cmである。色調は外が赤褐色、内が明黄褐色である。

9は高杯形土器の脚部である。外面内面ともに丁寧にナデ消しが施され、上部には欠損しているが円孔らしき形跡が見られる。色調は明褐色である。

10は第8試掘坑から出土した須恵器の坏蓋である。口唇部からまっすぐに立ち上がり、屈曲して丸みを帯びている。第1試掘坑以外で出土した数少ない遺物である。

(2)　石器（第7図）

11の1点のみで、第1試掘坑から出土した黒曜石製の石鏃である。小型で基部に浅い抉りがあるが、片脚を欠損している。このような石器は橘遺跡の調査では出土してはいないが、一本木遺跡の調査では多数出土している。

【引用参考文献】

小田富士雄1979「橘遺跡」『弥生系高地性集落跡の研究・資料編』学生社

長岡信治1993「一本木遺跡の地形と地質」『一本木遺跡』福江市文化財調査報告書第7集　福江市文化財保護教会・福江市教育委員会

福江市史編集委員会1995「福江市史　上巻」福江市

第Ⅳ章　まとめ

橘遺跡は五島列島を代表する弥生時代後期の遺跡である。学術調査はおこなわれているが、正規の報告書が刊行されておらず、詳細な内容は明らかではない。

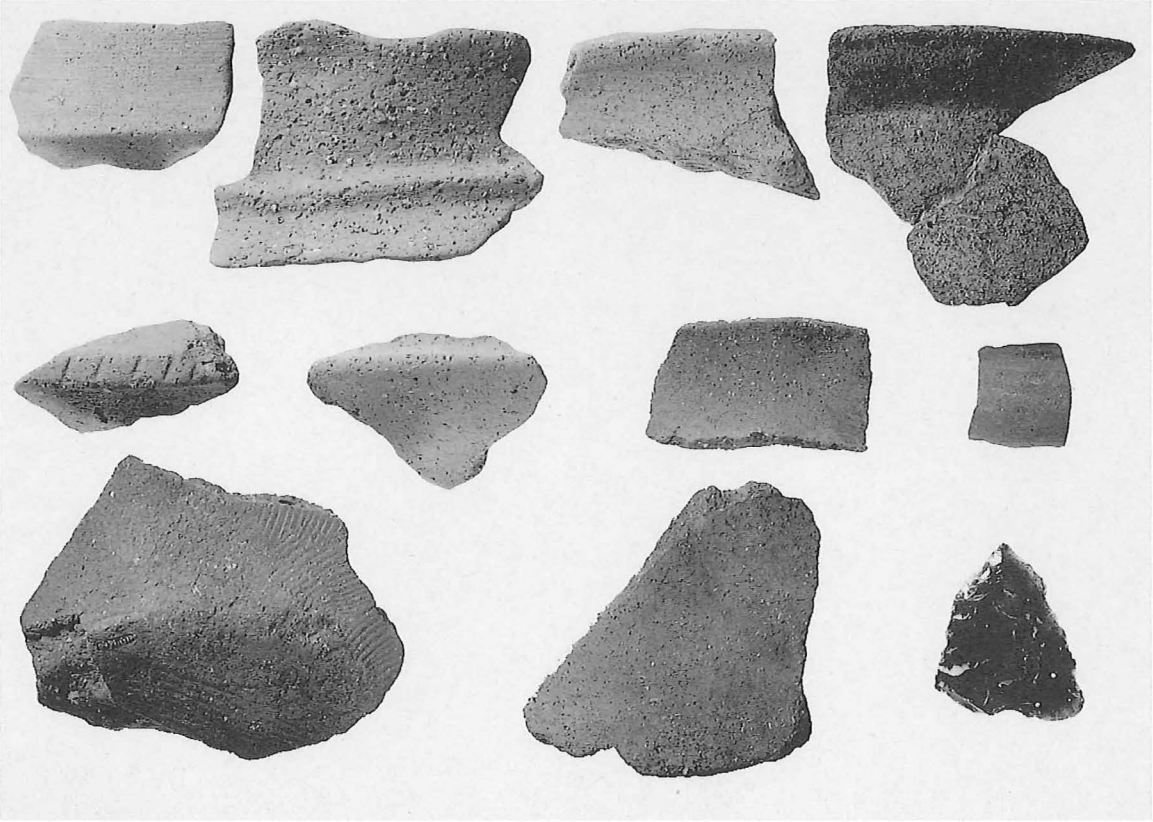
西北九州では弥生第中期後半までの集落遺跡が後期の集落遺跡につながっていない傾向が指摘されている。後期の集落遺跡は中期以前の遺跡とは独立して成立するのである。このような背景には海進説、疫病説、移住説などがでているが、3世紀の政治的な情勢と無縁ではないと考えられる。

橘遺跡付近には五島最古の寺院といわれる五社神社を始め、由来が古い神社が集まっており、原始古代の中心地域である。遺跡がある大津という地名からも、古代の主要港である可能性が高い。大津は、古代に値嘉嶋が独立した際の大値嘉郡家の所在地と目されており、五社神社などが郡寺の系譜をひくことも推定される。

今回の調査では弥生時代後期の遺構は確認できなかったが、今後もこの地域の調査および保存が望まれる。

図　　版

第５試掘抗



橘遺跡遺物

報告書抄録

ふりがな	ちいききょてんいせきないようかくにんちょうさほうこくしょ
書　名	地域拠点遺跡内容確認調査報告書
副書名	
巻　次	Ⅱ
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	古門雅高・山田英明・柚木亜貴子
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-0861　長崎県長崎市江戸町2-13　TEL　095-826-5010
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
上篠原遺跡（かみしのはらいせき）	南高来郡（みなみたかきぐん） 国見町（くにみちょう） 土黒上篠原（ひじくろかみしのはら）	42362		32° 51′ 16″	130° 17′ 39″	2004/02/23 ～ 2004/03/05	72	学術調査
カラカミ遺跡（からかみいせき）	壱岐市勝本町（いきしかつもとちょう） 立石東触（たていしひがしふれ） 字カラカミ・国柳・川久保（あざからかみ・こくりゅう・かわくぼ）	42210		33° 47′ 23″	129° 42′ 05″	2003/11/17 ～ 2003/11/28	37	学術調査
橘遺跡（たちばないせき）	五島市（ごとうし） 下大津町（しもおおづまち） 字五社の上（あざごしゃのうえ）	42211		32° 40′ 44″	128° 51′ 15″	2004/03/01 ～ 2004/03/12	54	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上篠原遺跡	包蔵地	古墳	土坑	土師器	
カラカミ遺跡	包蔵地	弥生	ピット	弥生土器 磨製石剣	
橘遺跡	散布地	弥生	ピット 溝	弥生土器 石鏃	

長崎県文化財調査報告書　第185集

地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅱ

平成17年3月31日

発　　行　長崎県教育委員会

長崎市江戸町2-13

印　　刷　川口印刷株式会社

長崎市田中町1020-7